

涼威道乃記

全

中村俊定文庫

文庫 18

1044



中村俊定文庫

Handwritten text in a foreign script, likely Latin or a similar European language, written in a cursive hand. The text is arranged in several lines across the page.

Handwritten characters, possibly a signature or page number, located at the top left of the page.



元文三年三月朔日
故了々津輕・川岸
元文三年三月廿五日
三月廿五日出版
久保田二今秋田市

紀行笈の若葉



やうらまのゆの久保田をめぐり北陸道は海を
左りにて越路の舟に月をこぼつ都にいつくこと
也とそとけきおとふあら旅に行もあつぐこにも
尚ぬさるゝ旅の具ふとあつり負たれとさかろし
戸田川と云とわたりてね々崎にやま今宵が河の音
におもろくされ夢もさるゝ人窓をひらけ波こも
にま来てサヨヨいもおぼろ月も朧もたにちと
啼つ水てあゝ歌

ふん残美家ナトナつてちと〜哉

あつらと空もり合はしてとさる波もさつらた田野は
にづらりて麦いよび〜と雑子もあらはよはら〜打
て旭にむら少老〜とさるわらう果

此作は津波ノ号
為蔵
雑子〜をたのむ
心成せん〜らん
りた〜し
為蔵

川ありて又舟をくだりぬ梅柳の影ぞ江を渡りて春や何
とては所は花も早はれとて問ふ昔も爰に雪も淡
く咲きぬ教にもはわらうの國よいまもつらうのこころや
のまじれりしと口を

我連の禪師むらゝお専友が爰に室をたもちおつん
いぞ見えぬさんやと道もまげてお入る日のおもひ指のかり
て見もやうべねものびらうふさるらふいぬくゆへいよ
かたまり咲きつゝ水の細るるに山が打落るゝ爰を飛
かしてこゝして少延分行に西の山のまきくに南もまき
室あり覚見こころよくしりていよまきまきつゝ撞構と
いよまき離して高き森の中に立れまきつゝまきまきつゝ
由よりむむとまきまきつゝ山寺の春のまきまきつゝ

伏せやあ教錫を音つゝ山様

さらたにとも人やおつゝと方丈のつゝとまきまきつゝのまきまきつゝ

駒止吉祥寺

上洛轉衣

ち教あらは杖にも水も字指もく嚙あり讀むおまき
つゝおまき捨て障子の花つゝ蛇をおまきおまきつゝ
なつゝおまきつゝおまきつゝおまきつゝおまきつゝ
とあつめて破まきつゝおまきつゝおまきつゝおまきつゝ
かぬにまきつゝおまきつゝおまきつゝおまきつゝおまきつゝ
けとあまおまきつゝおまきつゝおまきつゝおまきつゝおまきつゝ
ておまきつゝおまきつゝおまきつゝおまきつゝおまきつゝ
法乃とておまきつゝおまきつゝおまきつゝおまきつゝおまきつゝ
しつゝおまきつゝおまきつゝおまきつゝおまきつゝおまきつゝ
と清き我もつゝおまきつゝおまきつゝおまきつゝおまきつゝ
て禮を

二日いりて爰にやまらぬ

いよまきつゝおまきつゝおまきつゝおまきつゝおまきつゝ
西東よも見もつゝおまきつゝおまきつゝおまきつゝおまきつゝ
蘭其穀皮

とくいのゆめのいも入表あきりうぬびがばをそしめしむ
て種々曼と花々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
ひぞい

うらうら山にのほれ海に我ちうらうら山はけけよら山は
聲うらうら猶のうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
て初まうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

かくて愛の神跡も伴ううらうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
逢ううらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

三月廿九日書着

愛も法のうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
雨催すうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
かめあきうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
花も散りうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

卯月朔日

おぼよばあうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
花も散りうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
海のうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

吹浦もうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

かくの中うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

たり。さらば我向々十里行へ句なりん。
 是より六里の濱をほらして空をくぐりて波もくく
 凡むくぬて笠をこころの川も吹吹きおれ又雷にも成りて
 ねむりや初探とぬた晴れぬど人里も入んぞ風をたうち
 北海よりきて南山にのぼるるがわり道うがらひて東西にた
 ぶふ。常とらんおれあつたに佛もわかいらんかまらん先し
 人家あまたこぼれ又ちまた波のうらきたくサしてかゝ道
 迷ひの人を引だんおれんさるるつらふらん唯行よんちん
 成りて又二里斗も濱をくぐりて履を破れ飛んで杖も
 折もぬく腹うへて水に臨まご炎もさうらんかゝりん
 門も立此川尻の渡一守りしつらぶも別てなれんさる
 ともいふ事んとおもいふ事ん我々のまゝいふ事おれ
 ちばらく袖もちばらぬをぬりて飯を乞ふ穢乃ら
 あるものなりておれんさるるお振舞に老旅ももたぬんか

かて舟をわをもおのいこぬけり。

爰は清川乃表て別ち来て海に流れ境も近水のおと
 もきづくふきあれ夕の波もおさまらでがらぬて岸に
 つく酒田のみぎとつくとととんぞ誰かまちを行つとらつ
 棹をもぬに舟もぬりぬ禪師の眼もはらぬにほ
 ゆうでいりりしき人の心うねいりませんとてまをす
 おもひば酒田のいとちういしと三に禪師打ら立てば即
 何をぞまねぬ予ら曰舟子おれりしとへがもいしとち
 々まの也とらまもちまの犬の馴もくもあつて我もはなれ
 くれくして彼とくしてとも火ををれた細き跡を過つ
 せ入ちかちくももめし旅の果打はくも濡れぬもあつた
 せし三日もあつたの晴もきつとせぬぬも海におも
 みくくして陽炎暖まのげりも声もけりやうもあつた
 是らお國の春の雪も減り見もはげり花も高なるつちも

里ちうくちんを山もひましく葉の花も打くもりて空のけいふ
もあつこらな葉

北浦新桃崎渡

あく山む村上の城をさるゝ桃崎こ出

乙乙室事

初やしくし皆あま海国すく、空に能登の國あ鉄坪洲が

夏散らし木の外形一古曆

次第渡

行者に丁やあつても次第渡

空あつち霞く日何よる原中しちうくれがわく

べしとこ人のとよ麦のやりし穂波みまて夏大根もお

とまひり

空巨みまをくし卯月哉

野中の村ころあつち先にちやぶ茶所にくらつて

穂に出したんりも盛りなみた卯の花の時をくうへ青葉の

中に陣つちくさぶ小たまわらる押明つ先なる舟長の

舟をぐくのつたままると云いつこへ向入を十里のりれ

道と一時にく川へ早く新瀉お漢にん着がり水に此

まに浅るれ舟あけれだ近早しとまむむササササ

とこらうま、四つあがりと云空のなあさくすあいらてふ

なり葉のぼけいほげらなご云春のるも鳴つたがり

わうて摘花や指さる舟中

はる可お母お遊さよ徳いごう

のくしよこも舟長がづて我ちまきたあん水よこもさう

たも少くき旅人の船いよらんまよあひよつ書てんか

とふおうしけいさふところ紙にみうき事し

野に浅きまお徳波ふわし守

我ちちてたまわつて笑ふこいあつち菊がひんいひか

お

はしよ日は宵の海ふらふき落て大すやうなる川を横たふ
たよ是れ新馬の湊りしよしおと待って舟に着ぬ

一葉の途かどやう
花と月
奥の細道に主徳園

夜にぬきし油や若葉の秋と月

四月八日

ふいふと空晴て山とらふ青の白雲遠くまで
たつあま影のうらぐらうた透極見捨かゝぬて

葉に青き山風かこふて松かな

かこに指月寺と云寺あり灌佛の目さぬだまらうる

何ぞよま旅がはよけの七歩を

彌夫明神

あまのくさくさけりて法燈高明らかに黄昏のよどぐらやう

浮光のうらけりし青
雲の柳のうらけりし
白雲のうらけりし

のちのち神村のよま旅がはよけの七歩を

さみわくし神回れくさく夏木立

はしよけりたりよま木深き森はるんお世に云大江の
の鬼のいま見也一時其寺よぞをいひたりと云

おのちの鬼子もわかちと云

弘智法印の入定骨を解也

夏の日と骨にまぶきいなめりやう

いつと何と云をわけて詩の長演を思

おのちの磯し鼓踏の雪の音

両岸のけしとらつらむらむら川の流れかならむんお

おのちの云に幸りてわらう

此わくし平沙かきうらむら磯山の磯ふ不毛の地よといふ

駒かき

野よあま草やんおて駒かき

所のねとくうねりきた

野積渡の西生寺
弘智のミニイア

五月花々々所や青葉と境川

之山禅定の道を見物にたるふらぬ道ものぐれ人あり
とまこつた

下関や是らら細き杖おおと

^{高岡}高岡にやとりて一水く神登の國へ伴いり山も五里
いりりせむく

峯よ成り平ら踏ゆけと谷深し

風ふきぬをそし七尾に足も留むおのぬたうた細所
口とらふかりおおもて深きくし

舟に寝おおひせしと新ひる

こも人居もあるたおあやうきもどくちたよ道もそで
いつて行くん舟の長よ火おひまる要手よとつへど野あひせて
舟の子もさくいとゆきり

森やあつて関の上ぬく夏は月

遠つくり波もさやわた照しせのう爰は下関のうもた
吸ふけを水へさつてほいふかぬ

又とくれ声の志きうさけと海はほりくもんして

森のあを出るやう磯屋家遠きいさく火も消がたに成り
と明ぬ

海に起すぬ家ゆらうつらつ夏おと

旭あかふんへかきして山からうりともさうく旅ころもあやた
露深くこえて雨たけり行山路にたひ

卯の花乃濡てつもるやせ乃上

惣持寺乃亭にやと

谷こへて茶板おのく清水うね

おのりし門にのぼれ七壺雲た入りと木五深く高関は兼いれ
て皆のあもさつらうよきこぬ

かつつぬも僧おまふらぬあたま

勝所と波の上は志らしめりぬ

みしうあやうもあまの想もあらぬ

くふいさくもくして風吹せ帆も揚ねて足おきくしたもか

くし頃幸時につく此お雨

はくもんとた松の散りくねり雨

江洲唐崎着

江洲唐崎

人々の心も空の空もあやうもあまの想もあらぬ
みしうあやうもあまの想もあらぬ

紀行芋の巻と里

元禄三年四月

卯月ついで都に入上り京に於てはあまの想もあらぬ
りよとくしんむ

賀茂の競馬にて見ぬ

大徳寺にいらして・休禪師并像を修す

木の葉のまのむらにまはる五月雨

愛宕にのほれ

清流の壺にぬきあり夏木を

是より下宿城へとつたをたふしての字に別道つけし

若竹のみどりもこりてまをがに夕日お影ももろず夏

の女手ともいふ埋しこつた枯れぬ花の光とこりく

咲わらうて松風をく吹ありせり里黒木く鳥居のい

とけしんてかのもはま恒をこりてはまを物く

おむらうもまのあつらひに伴ふおめは是のころさかふ
にもうそへ八幡山崎のくまにやう申し日や暮りんとて
いれけし。

旅人お別れありて妻の状

ある日二條より重寛を問うけおのち井筒をわたしか
よて凡雅の身事しとて校していちぐらに業とて聊志もた
りしが我を見ていと若し何で凡雅やうおんよとや
物こころて凡流ひも何ぞ充ていせん我おさうきうの
雅とこのみ旅とこのむたのむべき師とてよした重寛
聞てお前の門業京師にもくわし野坡更らるる浪花に
残りのふつていふ答教ありん物少うて喜ひおもひん
かお事は何れ目と待ん登蓮がもよもし雨降らば
出立のふたふたお前もいふまじやとせしめし
百景のまじも林のむらみ伏見の舟のきき浪花のこ

此のまじりし井筒
をたすまをたす

去り野坡福井人
大板住芭蕉つ
元文五に没せり

津にに着也と人のしんをよめとちかたふたをうの道
のころせよとまご見ぬ五條の橋とあふれ

夕のほやいまを扇を折しあふれ

伏見の里舟にころる

初詠を淀も問うやけしとをい

野坡の閑長を浅生庵といひて在屋町をらん云ありに
あし是も人といひりもよとかくと申せむ耳順の翁は
いと清たにやせて背のびらかなうししむつしけなれ
類もせんよまうのぬもまここへお庵はあつ
がまご我いかくつらをもてきたらぬ
とへ給こといつた菴を打あてたまはけき國よりた
出いお人の都の掟もハエきりのうまご其掟と云ぬ
此人は國の人やま京のたうしれやとりを旅の親とて
いしてまごてやうまこころう許したまくと地のや

野坡の閑長

中庭梅位有人
待待つ

お道也風雅な女が
におもひなき者にあふんゆいむるおれがうらいたに風雅あり
梅位又我門の頭也と云ふ女も異也どりり風雅の變化
にあらん先我に對面女向あはれくしと云ふこころた
を筆入てこはるぬらん内向の猶ほつらまよはれと
師のまき山きま筆せんにもしは向と云ふ

川蟬や舟をよもいしてサ戸の音をぞ
菅嵐

数五月雨と旅おののあき
野坡

樂書と軸のみしりき筆とらて
風之

別してはらん重箱の牛
峯

明えたる障子とまをきくはれ月
坡

池の柳乃ちりしとらあ
之

下京の鳥たふらしり栗刈て
峯

隙より花も待人のあき
坡

寫真の入門

あつけくる寺の墨盤を
之

きやせしきとむらう風也
峯

沙汰形に畑境乃木とうくこ
坡

叔父師のちるた雅と牛を打
之

えらり門の行来の箱おもふ
峯

らめて甲斐なき去り状乃月
坡

千年の鳥居たふらう冷き
之

鴻乃古葉もあけうら露
氣

横とちれ日記も花の山うらり
坡

をみ川乃床乃枕うらり
之

一折いでまぬきむ鐘の戸きこへりあはれとにかけぬとて臥
ぬ

あつれい雨たし降りて物の一のゆるる水が翁在世のいり
かゝるもいとあつれなきこし目と経い水と喜たにりる

例つゝ... 風雅の... 志の... 夏も過ぬ、

紀行霜乃たも

世の... 秋の... 涼の... 是の... 芳菊... たる...

元文三年

七月廿四日...

わらで... 草

かくて... 臣の

行くてかみ浦さびきまならんがさし

秋のくも故きも烟のこしてのち

かくて金津岩沢を過ておぼし出羽の國なる山が
云驛トビヤにいづぬ山トビヤの志をいさるる水くるやうにて土田の庵
かりしうば野の花もこぼれわたりみよれておぼしに
峰のらんやぶが朝日はお月たやのすうにうらりぬ
二月廿二日也と云うの支考の二日月おとりりし旅
のむらしめおぼし出

秋のくも故きも
煙のこしてのち
二月廿二日
支考の二日月
おとりりし

春水

春水

春水

と舟にまかせせさう河田の女津りたやくへさういひつとぎ
に猶便するも水と旅のせらひる水津離苦と是人間
世のまもいもいと念じて獨往のころせつさうしが誠を
たつきおきやまうたあういひし馬の身津が馬
所がらん

春水

仙北平地

横生町
強湯山社
昌院

と舟にまかせせさう河田の女津りたやくへさういひつとぎ
に猶便するも水と旅のせらひる水津離苦と是人間
世のまもいもいと念じて獨往のころせつさうしが誠を
たつきおきやまうたあういひし馬の身津が馬
所がらん

院内と云関打こえて秋田女境に入津進津計が
ここのあはれ旅の靴津盡津きて草鞋津さういひも
かきつふいひつとらにぬいひももの代津とさうた三日
かきつふいひつとらにぬいひももの代津とさうた三日
つくら炭に燭津燭山津の方丈津京津よていれお人津にらんお
さぞおもいひつとらにぬいひももの代津とさうた三日
方丈おりいれおもあられ也と云うのこころいひ

はわらう雪降の國をぬか葉月のまねうら雲いひ
くくくして出窓葉月の露津シ津遠くよ移石の音をひびて

in the morning... the... of the...
the... of the...
the... of the...
the... of the...
the... of the...

紀行渡法師

元又三年冬

夕月霜のたつもまた空を此一七、わが道...
刺子もまらぬとわらてなごちぬかりと申賢のあ
る。夫婦いゝうまこいゝ枕をたちぬ。

雪降つてもう例の女ごまりをあらへけきくもあらず
申賢のあつて文も多くとりしうそおの金とほご
をのむらう言は重寛がもろも求得てかりし凡稚の
集とも是もろんむとらうたよきて古今の師と
もつに唯支考つのみならぬやうさきまは是と心の師と
耳にまこいゝいぬかて由の向ちりよゝおのり
かへにあぢく唯あつたたにゆつらん此凡稚のまこと
まらぬおのり定ぬかんの雪の降
るまらぬ

たて、猶老の音あり門は松

こころはけりけりわらうふ友もあつて志いしと鄙乃位長
を志のくこころ先きのこころ越の治耳坊行脚しきころして
支考が論に人さゆれしがたしめて凡雅と云ふまのこころ
てつま目のすめりる魚しあつりしきこころもさつり出
てたのしむいとおろしあつりし

春もる夏もたちあつた治の凡之文こころる難波の野
坡史のそりしめり長き病に臥たまつて親月の三日
終りたまひぬとそ三日の菴と云追悼の集を撰し
我白を風を代り梓にめせりつりしめり野坡史春を
迎へ唯し

春の心やあつりし薬に終りし

其の心はあつりし花の時つりし

かくれしと風之がかり中きぬ

住むあつりし禅林多かりしと経録猶眼にさげかた
音音の通さるは大意に向て眼光落地の一場とまの
むとおもひし法師も打笑ししと水滑靴のこころ
たつと以大仙の法心をきかめんとを教ハ唯鳥を拳にとり
猶飛鳥を拍んとを教ハ似しとこころに鬚髪あせたとか
ま先つしと護つて顔坊とまづりしとこころにハハと志
りに出せをすしとこころにハハと佛門夫入を許
さバ飽し出んとも許さずヤ我もく佛門を破るものと破
戒の僧とて是とすしと我是ととん出入自在の門
にあらすんバ何ぞ門関とんハ我おすやとらりしが
り矢とつよく生と殺とをみとたしむ我佛徳といふま
の、中

掃除きれりし寺の墓所

温吹

とくた

維子の出て鳴々を何きとておもひぬれ まき

ふかの初發心の俗心をソク我りて是に心もかりて
 淫煩は夫世のつねあるく意又凡雅に癖して夢にだも
 わすれぞするふかありたりと以て長く佛弟子とせしん
 我が入せたるつひも也といふ法師をもとなくかりて
 其院の長老に告たるやあらんある夕凡悲う喚きて宣
 のけうふたれあるたいつとさるりかりりバかり院にゆきて
 かこふに長老一椀の茶をあげて古人喫茶法とて教を
 無しあるも一椀と授けて轉所と見せ我うこそといひじ
 は茶郎が咽に入郎が心いんりある我曰いとすい
 うん今一椀まいらうとて手つと汲てうんこれと
 我うんとすふた是とてばうて我是とある一椀即又喫せ
 たるものみちるもあはれなるも老時曰一里の苦

樂心今一椀の茶を飲んばおぼそころは得て是とたの
 しみ得がはれ是とてくもむするは苦樂の空取のともく
 苦樂止どんぞ増愛爰におこも増愛又喜也と生ズ
 喜也は罪障のとも也とてくも一即一場の凡人也花の
 ころ一七のどふなりしが雪のこち一もむもやさむけき老郎
 がいぬ一音ありとて

五七と文字引りけ見まん何もが
 向のすのいともを何をりりらん

禪心則凡心するこももろくがれも閑工夫也一れを又法
 心也かりしも又舌頭地に流るる念誦時ももりぬとて
 老は佛殿に参りたまふのぬ

是れも雅境にぞうくすのていひももいとむりかりしが
 ある時思益經の中に雅思辨女の歎ある者な起業の開
 土諸佛の能化なりとあると見てふもろくがらり

平河村集傳

元禄二年

三月三日元禄元年

このついでに又はおもひ止す。こゝにわかれ都の國にわ
ざり久しくあらん先武城を出て東西の志をかこた
しむ。武の禪坊小行僧のあそをかこしむ。俄に津衣のそ
たよかゆ。つゝ太刀二つ帯てこゝに代。こゝに旅の
料しむ。あつらひしむ。こゝに安かき。

春はまきまき。の葉はこゝに馬のこゝにまきまき。こゝに道
のこゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝに
まきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。
こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。
こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。

こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。
こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。
こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。
こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。

こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。
こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。
こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。
こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。

少三抄

四十一

陸前岩代境

目もき比る。こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。
こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。
こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。
こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。

こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。
こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。
こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。
こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。

こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。
こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。
こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。
こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。

こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。
こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。
こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。
こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。

こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。
こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。
こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。
こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。こゝにまきまき。

佐保媛に爰て逢ふ。初十

まゝ舟への馬や木の葉に見せて置

浅香山と云ふ山にまゝ道のづゝとけしと云ふ
むし入屋多くと云ふ山にむし入屋多くと云ふ
爰にかすらひつゝ其山を打たれむし入屋多くと云ふ
公利の古代に打たれむし入屋多くと云ふ
山乃井やいさなり影のあはれむし入屋多くと云ふ

あつちやいさなり影のあはれむし入屋多くと云ふ
乃若也つちやいさなり影のあはれむし入屋多くと云ふ
爰より川舟よりのつちやいさなり影のあはれむし入屋多くと云ふ
づゝとけしと云ふ舟にむし入屋多くと云ふ
傳達七おねづゝとけしと云ふ舟にむし入屋多くと云ふ
誰もつちやいさなり影のあはれむし入屋多くと云ふ
舟にむし入屋多くと云ふ舟にむし入屋多くと云ふ
舟にむし入屋多くと云ふ舟にむし入屋多くと云ふ

いと目あはれつゝと云ふ舟にむし入屋多くと云ふ

たまたま舟は川の岸よせし回らむと云ふ舟にむし入屋多くと云ふ

我道乃つちやいさなり影のあはれむし入屋多くと云ふ

先づ行つちやいさなり影のあはれむし入屋多くと云ふ

たまたま舟は川の岸よせし回らむと云ふ舟にむし入屋多くと云ふ

此れは花もりのけしと云ふ舟にむし入屋多くと云ふ

また雨に舟は川の岸よせし回らむと云ふ舟にむし入屋多くと云ふ

また雨に舟は川の岸よせし回らむと云ふ舟にむし入屋多くと云ふ

流し虹のころと云ふ舟にむし入屋多くと云ふ

あつちやいさなり影のあはれむし入屋多くと云ふ

あつちやいさなり影のあはれむし入屋多くと云ふ

けしと云ふ舟にむし入屋多くと云ふ

いろあはれつゝと云ふ舟にむし入屋多くと云ふ

いとあはれつゝと云ふ舟にむし入屋多くと云ふ

飛ちぬ空に暮のそよぎ雨後の夕風も涼し

雨雲と花の干せし柳うね

けおろし梅吉野寺のふもとあすも成りて武城につくさくら
武の駒込なる梅檀林に伴ひゆりて我も寺前病僧
りやとててなほ相しるものさるけいこにぞ
頭陀をわろしぬ

夏にもち小く青梅大町といふふりおきし武元野の内なる何ぞ
りへる山間に夏をむせぬ寺のありて我も行なふの南
に風呂乃入りとらふありて先キは信持かぬこもれおは
先僧こものあつた凡雅とこのみたまひしうハ我とはよき
あひいさるし

長雨のころに成りて煩いてさぬさる夏とやうして又武城
にかへぬ

此の山に梅もあつたしは梅の垣をめぐるといふもあつた

寛保三年

北場五郎竹林
の眼ち

ぬるし

春に成りてついでに草鞋むきし書て一鉢の便しな
るに人々はのこりにまうせて北のこの十里ハかりの
いさうに小林と云禅室のあつた説経者と成りてや
辯を高かへも其徳とせまうてか乃大会の強物に
や似てん

家

ノ

山一

布	l	u	u	u	u	u	u	u	u
o	o	o	o	o	o	o	o	o	o
e	e	e	e	e	e	e	e	e	e
i	i	i	i	i	i	i	i	i	i
u	u	u	u	u	u	u	u	u	u
o	o	o	o	o	o	o	o	o	o
e	e	e	e	e	e	e	e	e	e
i	i	i	i	i	i	i	i	i	i
u	u	u	u	u	u	u	u	u	u
o	o	o	o	o	o	o	o	o	o
e	e	e	e	e	e	e	e	e	e
i	i	i	i	i	i	i	i	i	i
u	u	u	u	u	u	u	u	u	u

山一

紀行ち・お山

卯月のち一丸おまらまてちるぬり親世音とめが教
 十九番の札所世の戸とくに壺守の禪寺にむとりて
 志の一日を消す。

毎の戸を風にもよるんちとよまん

方丈我にとりめて、札所三十四所の縁起と作て世の
 人の耳にのれど、ちかき功德も一とらるゝもふふ友にお
 もいとあこととよまん
 お我ちくまゆふ順旅し、ま、實に枕境もあらし
 おあめ、

峰にまき、洞に霧りて夏にんち

此れか、馬にりて、所に斐と風のとよまん地せ
 が其おる、砂ちちる、ちかき、説經寺一院にか
 温

寛保二年十一月

見目山長泉院

十種峰快善和尚

小林村正眼院

此ハ物も数ふべ猶やまらぬまをわらわやに成りて秋の半にいづりてい申。

冬もこの春も立ぬらん又世の戸にやまがのめいさか

寛保三年

巨長山菊水寺

毛虫貞純和尚

は秋三十三年の札文菊水寺と云得まにやりてかへ此地を安居と定たるに^吉田と云下はわたりちのく家をもつぎく^一凡人もおがし^二うべ住まいお^三こべと^四方丈物せらるるにまろせて猶ぶく交りてあつぬ馴てのちいれなき庵を作てこの發願の外凡流他事りあふん菊水寺の和尙は城なき一物乃道師におりて漆桶打破ありて高穴のほら^一遊他^二しつあ人も^三食客とあつめし人中はたの^四とみちいなり

又此の地を山鹿野と云ふはもと古藏の地

山田海流經員百梅

淺生庵野坡

ういと申こ^一き市やるや百梅可登りてら者せら^二にこのたりしう^三の物をも^四い^五ふ^六い^七びも^八落^九ち^{一〇}もの^{一一}あ^{一二}つて^{一三}淺生庵共むり^{一四}る^{一五}ら^{一六}ぬ梅從風之り^{一七}交^{一八}り^{一九}き^{二〇}こ^{二一}か^{二二}た^{二三}ん^{二四}吉雅の風境^{二五}を^{二六}こ^{二七}も^{二八}もの^{二九}い^{三〇}で^{三一}ま^{三二}ぬ^{三三}し^{三四}田^{三五}に^{三六}架^{三七}格^{三八}と^{三九}云^{四〇}もの^{四一}あ^{四二}る^{四三}是^{四四}は^{四五}武^{四六}乃^{四七}白^{四八}鬼^{四九}圖^{五〇}が^{五一}隨^{五二}從^{五三}に^{五四}て^{五五}風^{五六}雅^{五七}を^{五八}こ^{五九}も^{六〇}い^{六一}よ^{六二}く^{六三}我^{六四}と^{六五}志^{六六}を^{六七}あ^{六八}り^{六九}せ^{七〇}て^{七一}菊^{七二}水^{七三}寺^{七四}に^{七五}翁^{七六}の^{七七}五^{七八}十^{七九}回^{八〇}忘^{八一}し^{八二}る^{八三}ら^{八四}菊^{八五}塚^{八六}と^{八七}ら^{八八}ま^{八九}き^{九〇}つ^{九一}く^{九二}着^{九三}さ^{九四}菊^{九五}の^{九六}吟^{九七}と^{九八}も^{九九}ま^{一〇〇}ざ^{一〇一}り^{一〇二}し^{一〇三}た^{一〇四}

忍り入て石高き菊の花

書肆乃こころしたるをもあ^一ま^二ま^三ま^四ま^五ま^六ま^七ま^八ま^九ま^{一〇}ま^{一一}ま^{一二}ま^{一三}ま^{一四}ま^{一五}ま^{一六}ま^{一七}ま^{一八}ま^{一九}ま^{二〇}ま^{二一}ま^{二二}ま^{二三}ま^{二四}ま^{二五}ま^{二六}ま^{二七}ま^{二八}ま^{二九}ま^{三〇}ま^{三一}ま^{三二}ま^{三三}ま^{三四}ま^{三五}ま^{三六}ま^{三七}ま^{三八}ま^{三九}ま^{四〇}ま^{四一}ま^{四二}ま^{四三}ま^{四四}ま^{四五}ま^{四六}ま^{四七}ま^{四八}ま^{四九}ま^{五〇}ま^{五一}ま^{五二}ま^{五三}ま^{五四}ま^{五五}ま^{五六}ま^{五七}ま^{五八}ま^{五九}ま^{六〇}ま^{六一}ま^{六二}ま^{六三}ま^{六四}ま^{六五}ま^{六六}ま^{六七}ま^{六八}ま^{六九}ま^{七〇}ま^{七一}ま^{七二}ま^{七三}ま^{七四}ま^{七五}ま^{七六}ま^{七七}ま^{七八}ま^{七九}ま^{八〇}ま^{八一}ま^{八二}ま^{八三}ま^{八四}ま^{八五}ま^{八六}ま^{八七}ま^{八八}ま^{八九}ま^{九〇}ま^{九一}ま^{九二}ま^{九三}ま^{九四}ま^{九五}ま^{九六}ま^{九七}ま^{九八}ま^{九九}ま^{一〇〇}

文月ま

と云ふまは八日ひま

またがしつ亭に方丈を請

浅生庵野坡

菊水寺

武乃白鬼圖

おやもはるめい西の風はつよく吹出まゝおぼし
てらりののたせしむいさゝか大キあつ杉の三もまて
たふら子へいれ庫裡の半崩れおぼ病危とこめたり
いさゝかもはくさこももつぐおのこのおろにやと
ひきぬて火をんよくちつめをんであわうづーとたれ
たふ梁りさくごまのりさく水もさくきかけらに火火
の先何やまもどかして落さく此のわけもま教さくど
かおていさくおろれ声くやまたまけいおしとさけぬ
まう件落くがさるん丸ま腫あやく先り後のおと
りまうが南にめきてちうつくし火乃らうりにあひ
せくるおも何ら似てんさて雨のきりうて吹入る水を
方丈の襖乃もろいさくおろて壁代もつふものこひ
らぬくをうりにさつげさあちて火は御りせく消る
いかにせんまておまかたもまのまもまに佛殿の棟尾

次とあちてこけらに葉のこくにまもちいれは雨お降か
た、流もしておとせいでんるませりらあやまい雨水にあら
がわ田の代わまていこむさくこりやうにれおぢの本尊は釋
迦無二佛あまがわか君禱乃行せあつる物うけにんおひ
まどみくの髪つひまのくちまが泥に埋こる由螺も
見かうにくらりせもまこりおまいりある天変乃まじ
こよせんおあやまきま又よるまこりて命つ流まやと
おもたにら所のまもれ在るお候かにおめまこちておま
まらなこのちやまらうに親まらうね子とよぶ声のうて松
だたらがーまのえんべいのま外ま顔して爰とたの
まのまはせめのがくやままこまのまこよふふもまはま
泥の海ままていさくはくも漲入るまままびのいのち
や爰にのがれおまお素と失らぬ物も子を流す我
は嫁がまものを漸あてすまのいのちのらひるん

白鳥園宗瑞
光七世後
依名柳若旗本
二申

白井宗祥
吐龍吉川氏
後秋風又無

如是庵理
九印助

宝瑞亦武にゆくこゝたも雅とむつんでこゝろより老人が
けり秋のこり身まのりの柳花をい勢北風雅をてて
門人喜凡に帰するもの多し我流の古雅も嘗てこゝろを
たれど喜庵にた風人のちつもの日大我もわきて雅は
の文りともせと菴主鳥醉吐花陽さかかふまここの首
途の秋乃こりて申ぬるわした柳花吐花秋の句とて送
富士川のあつりに柳花の門人あつてとて五のあ
く一富士のくろ人とまここ一初語たたくみなりたる
せりつねの人とまあつてとて人あひまひして其あ
とらんいてらん

其くろき顔高ゆう一富士乃雪

駿府はサたかこれまたやとて爰中七日教ふる雪

竹に鳴る音さく細一初一くさ

尾城と如是菴を訪りて風遊日とわぬるわしたのや霜

降し月にも成ぬ

此地もこゝたに雅友多く巴菴五條坊なり州人の如是菴
の主と風雅にちうかよひやうよもまここの故人らも菴の凡
雅にまひて教人うがとてをわきこつて雅はたこゝた
及らわす

たぬ雪あまてえてやう軒

かくるはあつとて理然州人送るぬらりの宮は舟に
ぞこつるを宵のさしりさる物も似も

何のちりくろても友や小ねちる

とももあつとろ浴の九十九庵も着風之其こ隣家に
隠身すをも受て先達のそつとてまここのはとろ水もよ
まやどもしらうとて我々の隠言にともむ春にもあつ
こゝろ西國一見と書て

たもいしう神をり柳やうとお春

武家巴首
在傍は木見
六六太田巴靜

九光堂

延享二年

彭城百川八仙堂

半野庵移来漫

源苑の梅従この句と觸れてこゝろ西の國の行脚と定む
野坡の庵は高津野にけしむりに三百の庵をさする我新たに
法流の庵也さすふあをさする凡人もあつりしかど西海
の行脚つゝかきくあつりまは庵のぬらんといかりて梅
徑風を我を子とて喜ぶ

そのころ八仙親をこゝろに百川がこゝろより高麗
の名ありて其句に其人と云ふる日あるは野坡門を
見こに多ふくハ半時庵の所作にして句の先きこゝろと云
ふし又まきこゝろはいと古代よりと云ふるを吾子何ぞ
は徒らと云ふんともいふや賀の金城ハ希園ありよと麦林の
發句と得るも我昔昇角のねありて支考か門人たり
やといふも凡雅の境をわかれん久ない執イも信イと
麦林を師とすにいま能治と云もの天下に多ふしと
いふとい執もして能治とせんと凡雅那箇にあらん

いま吾子北海にこゝろ希園に彼句の安情とつゝ
又ソ執もよきて梅路に内句と書る凡雅の友翼イ爰
にとのりん何ぞ人情のつゝるを問にこびて梅從風之
か徒にこゝろとすやハ心と云ふ志とかんとせむ闘
争イ爰に起りて行脚の仇又爰にあらん我らとつのは
こゝろ加へん吾子こゝろて凡をにむらぬ我佛門にあつり
いとも道と行せんさすははけれせとくま入イ也
きく山阿子叢林何して三午お威儀爰にとこゝろ
たふけ門よ入て行るとやぞ送行イのりも佛爰にいよま
こゝろて再び唐平の凡雅よくらんと念イは念に決
ぬさるは山山の雪と踏んてかの雪山の難行せん佛に
一諾のたがひめを謝する也といふ凡をかれらんは行脚と
ゆふく一イもあつりやく山阿子かれ其言とて見て在イむ
故人もすこゝろ也と云ふも葉イとすこゝろかといふ風

之にちりくしのむさかさまの御にさく者にあつた
ちの應いこいさくしめてやらうは行脚のこいさく比
まをきからんも大和路を踏んで草鞋をこいさくんにをさう
ぶとおもひて観月のこいさく宇治にくらぬ
宇治のさくしるすくはきき葉摘哉

南部

若州に影やまるとして三かきしん

三輪

うしろの風や吹きて三のり杉

初涼

春もまゝ新の色や山 横

當麻

糸遊としりり深き山乃上

遠行の寺

遠行の寺はあつたかたはらにやうやくの寺

1706

白あけりの背中に啼て椿をわ

法隆寺

夢よのこ梅く出てする胡蝶かめ

冬り多う餘りるとしてはほいさくか
さいりんかひさしは吉都の風景も長雨も百うけ
にこそあふ又まんところるれを大かんに見かしてく
か崎打こころ難波のあかまに梅ぼりもたやん
てかのいありのり柳ももたかかまこころれが我已に
西國の南のゆれを回志おもはこころ櫻もさくは
けの道のとあこまこころたこころんも許さ量より
夜もあふりつりて法よか入あ

伏見の梅

吹くりて竹折かまやむあつる花

まらら七日本都をこころて山陸ちまかりお近江の圃長瀬の

1706

春風に吹る水に山けりうのこくに林し雲かの素
嶺に横つて家^{イニ}も見え人雪を藍^{イニ}を擁して馬進む
と諷して暮行空にむらじく行先いりり何ん

夏近の花も見えしと春の雪

か北國にゆく水はさの女も何んむき^{イニ}への^{イニ}き^{イニ}の^{イニ}き^{イニ}
出羽の春にも似てんかくて人玉城に居たりて暮柳舎を
とむつ、百川文こいれも出スに希因喜のてさらハ先
叢林、大葉寺に返へるん一夏のまこと佛弟子と成り
て僧行をも見たり長風雅乃物かうるあらん文月に
到りて送行の日のかならん我暮柳舎にきこくしと
約して先の大葉寺の山にりるぬ

暮柳舎希因

全次南方無名山
こいれ大葉寺

嵯峨葛城山
都因と改メシカ

紀行北南

あるとき方丈垂示したまへる中々に江山如月舟
禪師先てましませしに二世の^世秋高のまゝ若くありて
か送行の日^送秋高のまゝに老僧のたまひけるを何
を看^{カシ}經^{キヤウ}の^ノり^リ二世秋高のまゝして大經らん^大經^{キヤウ}して
さうらふ老僧の曰よくあぢくたまへりや秋高をよく氣億
をもる人にておろせむのり^ノは^ハ經^{キヤウ}と^ト生^ナしてむら^ムへ^ヘも^モち^チこ^コう^ウ
たうらにびんぶもて其の^世り^リくを問はしむるに禪師
又のたまひけるは若き人の氣億老僧何れ及ぶやうん
物^{モノ}は^ハけ^ケたま^タま^マせん^ンさうらふ叢林の日用板をすてハ噴^フ粥^{シヤク}
鐘^{シヨウ}を^ヲす^スては誦^{ソウ}經^{キヤウ}起^キ臥^フ安^ア禪^{ゼン}唯^{タラシ}常^{ジョウ}を^ヲれ^レも^モん^ンと^トあ^アち^チ
さ^サら^ラり^リす^スと^トむ^ムら^ラき^キ法^{ホウ}經^{キヤウ}の^ノ事^シや^ヤま^マと^トむ^ムね^ネみ^ミき^キ
り^リ表^ヒす^スこ^コう^ウと^ト諷^フして^シお^オり^リる^ルも^モた^タふ^フと^トあ^アら^ラに

大葉寺廿六世中興
開山月舟

してひげるとき山を兼り敷葉と云者希因に風雅
をせうらて秋もよくてうらうら水は行脚ゆくたりしがあまり
に遠ければと云うん
穴水と云はむかしも夏よりそ七尾に船にのりたればけしまた
はるとかへお

七尾は晚九五葉と云もつかりやとりま
司野の宮に出るまに海をん
是より杉戸の橋く一里ありも行宮也和歌の集にも詠
て入るる所なりし

ところの人乃物かうすはは橋入江水上にちわじた
れち松柱も無一は軸後御年の境川にまかお橋ハ
野々水と云は秋之北門にあつても多々の鱗あきりく
け橋の下と過て海の外にわすれ也秋のわすれすいに見
ゆと云又松戸よりわけて涌浦と云あつて浴をさる地也

晚九五葉と云ふ一とをよりき道の序ちれた其橋も過つ
終とくゆきくるとに寒し里人のりくことくひろかぬ入江か
れも大魚小魚かき多く合ひて浮き沈める其ぬと一とん
み北とてしてのぼくと見ゆ旭の光りにうらこをかへし
たれば花紅葉うち散りくるをかりにうらのこすあさきみ
りせしと云りて見宮まうの穴かへるまき多しよ水所に
もわらうと云い網してはとらむと云に秋のとかめたまへるな
りと云

又此わらうかうびと云見多し所の司も漁獵のまに命
してれ一もくとしてまむむかしくおるらひ也と云
是より涌浦へハいとちかきよりつきて見んに海士とももの住
がしてわびるき所なりと

温泉の海の中に二三丁ばう隔る中島にて波あらく打
たすれと島せん汐にわたり風をよむと浮みくるものやう

に見ゆるうけう細く立てゆるんわきかく表尺ばかりま
もてうかちるる波に浸るやき桶ともいづくも置きなら
べいこにうへへ入るもあつる水は潮る多波に入て我
う入るへきけしに計りてひそりくかめ桶にかまうい水
おろして桶のたうらるる唯風にうられて人の出表をそま
い表りともうき湯あた水と其功にあつたにもま
たうとづう変々のまへに癒てかへりくるも多

おは牛島にかまうはけしへへたれ海の浅き所と
まき舟して指てわらあかのやうする海士の家たころもたぬ
まこれけしのみま牛々に棹さくわくせも又物かくのま
又た米蓮の繪をまがく無らつるもあつる見ぬお
お角かにまきまけしあつる病あつるもあつる
おまはまの桶まきまきまきまきまきまきまきまきまき
おまはまの桶まきまきまきまきまきまきまきまきまき

らうんタラハらせかくる波も凄く爰う往か人もまき
た草深く露にあれて赤う穂あかきあつるまきまき
のあつるに残して風もわらまき折くハ汀うけしに立出
こえお

岩角お鉄ゆく鷺や秋のうら

又筆島くしうらと
筆一まや黒く月うらと

又七尾にうらうら菊月とをあつる

千句塚と云は高き観音の山のふもとにはあつる風人筑
たも也と云はれせうやの句を彫入るる麦林のうら也

ははあつるに鶴取りまきまきと云ふものありせは名も
家と一まふ七尾よりまき北の海田に一九六と申せん

まきまき霜月卯の目とまきあつるかねてかの鶴と
ひやうまはあつるのあつるまき能登の浦に出て見ルハ

筆島とつる
まきまき

御後中山能生権
 現ノ破

かにん鶴の多くあつたりて汀におりてと兵衛唯かき
 てと中々にしけしへとあつたりて外に飛去りて
 ひとつ得るを籠に入てもちかへり清むるわざともの秘蔵
 ありて是を我家におくはちと飼せんともさらにおろへん
 やう包く卯の白鳥祭に成りて一の古にせんもちあさ扱
 ぬすりおたる次大庭にかり火たきてりの鶴を放せ
 けしききりしにのけりて古燈のそくをくへてひかりを
 かん是を水祭の果と扱又籠に入てまを取得る處に置
 けたおのれと波に入てまをくへては是を遠く熱後の園何
 もかりあつてに寄る其所たしときおまうりあつたは鶴の
 流るるに白鳥として催す定むる其由神一の向をばは
 らかぬ此歩ゆらんおをく云霜月かきん卯の白鳥
 てのまももてよも所の人をく物やうは
 賀の希固文うらまはるる

20

こちむけと夢と動を瓢箪

としふ向と見るとする人我をやまつらんといふと七尾
 を出ル

河合見凡枝鶴
 由理理者多

金城よりけ方に津幅と云所ありて枝鶴と云者あり麦林
 に意旨とつへて向昔多くもちりて爰にもとまうし

金石港

金城ハ突に見雅の地こそ俳諧せんといふもななく
 たる交雅遊をもやけていふとせいのめもある魚し
 宮の隅と云又北にあつてし升するうが此の人々我
 たりしりもまともやけやうすくといふ小金城北極
 宿と云うん

住かハ我我を自や初しりせ

浦乃ちちちも飛をゆにま

越中福野、其汀石割の明非小松の江まると云もの

江戸三平
 浮世三平

風雅もたぐみなるおのこ也けり。金城に出て我も風雅と
ちりぬ

司鮎又かへりて金城にまゝるころ庵舎を

金城と浅野川岸川と三川新ニシテかた誰陳の

集のこく志とあち雅とひとむみりあふぬと希因は

浅野川に在れと岸川の人ハ立をきれりやうにま

いかずへこもきる先のこしりせの栲路くくしてあり

時と岸川の人け栲路にやうして實に女人をよく附白

にたくみるんとおしやくおちくくるもあつて和風雅の

境をまに移りこる人も多

種も栲路の附向とおもふ古今に獨歩してたゞふ

かにもあふ希因とみまうりよく得ていれぬと附向も金

城の一流にして麦林終りしてちと附向こした多かすは

ひそうと岸川の人とけおもむきんはさとしてまらん浅

野川ハ唯ひとむきた希因の凡邊にまゝとてうら

おれいりくるるもあらん

杖乃先と云集と撰と希因ひとり其巻と作れ我

集るれと彼まはまうせらり其判者も集りて見た希

因の附向りまよふ所と千里のたうりあつて

希因つねたこは附向の唯志うらむるおもむきハ

芥子芥さうり乃四月中旬

唯かゝるまゝに能く語るへいと云

又巻中乃こゝとさすかの續きみろの句時にはまか

とと云

り、撰点する向もあらぬ向ととりて社中をけ境小

ま、めくくし

や、夜日にかれうらまの工案とてせむよく因が撰

點のりなとてとてしりしがあふ百川いへるこく伊勢

七七

にのみきこき物縁にまふたと志んを志まふらに其さうんを
おもふりんとあつうふ希因とたひひのそまて人情に
むつうきこきとれあふ水のりふせり先南行の思立
て五月のま枝をむかひかゝるもまたちえりて暮柳舎に
ゆくは、そ徒送別の舎ともかく

涼一十と出てゆく水柳陰

是希因に苗別せも也犀川は野山の雅友いそり
と送ふするちとん水無月のりとらん金城といふ

松任乃騎にをりてちあせもやけい教ふ舎を

かたひと自らいひあふ

204-10

室定の園にま物成はま路を無心其あふ
は人々興して山伏ふゆるり脚にたわする通一詞

204-11

河原を青もたふ勅進帳もあふ
三女と津見や蓮乃若きを見せる

湯の尾峰にいもの神お子孫ともあふ

直教や酒湯のあふる色にまふ

三とせりあふりつは山共雪とあふりていまこいあふ
き道つはとありしといふちしるもあふあふあふ

半なまふりて雪乃りて我の雪なると
いふものにたねて木もりやまたたふりてあふ若葉

のききさるりてあふらうたふ

ちとていよゆとやあふ

近江のあふりわうりて入る道のあふりてい勢せうたあふ
聞た出てりてあふ伊勢もあふりてあふまふ

麦浪亭

人々宵のあふりてあふ屋を草枕

神風館

松と教あふりてあふ先いふの上

西行谷

茶にかゝる歌羅すくなくも清水哉

千載の地も風雅くや、川糸別れを交又相拒ひむとも
 あれと秋唯梅路のそ天々下の師也とかもいし、
 う門人ある秋まいけりもておぼゆるんともまじりて雅と称
 凡館のまたむつふ素浪の亭にもかたりし爰ら又雅友多
 ぶいとくし武の鳥酔木曾路を往てきこる
 柳居物ど先けあつに何そひて今もまた出ると云
 伊豫の志山まゝるは、再会を爰にちきりてうた
 水を月の昔芝うきりに大延る匠らと名跡とて鳥酔
 あいとしむいて松板と出ル物大和やま和とにいかけえ
 床うつた袋々おも一床う角
 是ハソせ入人々に送別北堂とわいこつと謝さなり川ナキ
 此れは高秋の再会とちきりてまじりて雅と称

夏草に下たのうらみもすしりけり

紀行梅の便

いせの津よりたりに別れて伊賀を歴てやまに大入

麦畑橋森川古山
古山千代延喜三
年正月十九日

萩原也。古山の亭にやまを
古山は千代を茶りて愁又秋の空にむらふころるん

大津赤う赤あ赤あ赤はの柳を舞ふ
鳥酔赤もめ赤りきり赤きり赤

千代は麦林は文字の赤と赤つ赤て筆に功赤なりしうと

残赤るは赤ご赤も赤あ赤る赤物赤中赤り赤く書赤る赤る赤もの赤も赤い

石に摺赤つて赤ま赤り赤の赤れ赤を赤ま赤し赤て追悼の集を

爰より集赤成赤して雪石摺と云京師橋治乞得て極す

十方庵茂秋世と早うしてこの圃赤ある赤あ赤と赤と赤めたる

麦畑橋のあ赤ら赤う赤ち赤の赤さ赤念佛赤の赤ま赤ま赤基赤行赤住赤侶赤と赤仙

壺赤和赤尚赤と赤ま赤ま赤瓜赤種赤も赤この赤の赤の赤へ赤り赤せ赤め赤叟赤も赤れ

雪石摺

誠通念佛宗東證寺

りくろやうりしし

十方の空にまじりて

け句の菱秋の暮前にて

大文字の火も

是の雪石摺

法の風之秋のころ

金城よりあ入りて

とかけ津松坂の

我愛あおもふ

いふとふもの

いふ凡雅と

らまひおひ

とおもひ

1650046

秋の葉

後風石月

中川杜菱又菱浪
已由甲

是より席とわらちぬ

文月の末言た

てさるいもや

いよお志山

二條より重寛

百川の續

とす

柳居約

花

同調の社友

夫より司鮎

見んと約

九月廿三日 司艸と任吉女にむかひてしむげき音
 樂の入りりしとき、て回廊に立ち、柳居杜菱、
 相見て亭を打に風之あつて我をむすむ柳居我たむと
 をいへては、さちのたふめおもひのちやうししかれども、
 之と物りららん、何のそしとて又司艸とす、
 夫より三子もむらふ、柳居にわらさし我、司艸を同じ
 て、さるかにいれ、目も暮つ司艸、
 たのこちりし、
 おれらう、
 ばかぢも、
 せん心地、
 笑ひも、
 には、
 徳明

梅従あつてして、
 ちよと、
 いかに、
 きつ、
 人、
 枕を、
 枕も、
 何、
 梅、
 ちよと、
 きて

かく、
 のち、
 け、

おのゝ瀧水句ありて是より柳居社麦く我々に別れ
 花のまをりとの暇ゆふもよきなるしこまに神崎乃わたり
 といへばおもひくふかへん旅のやよりにかんた
 柳やもしたにわたりしあはした菊月のまをりし柳居を
 まふかへりしよきこして社麦もやまをちりに別れしせふか
 こころし先ツ麦居橋よわたり
 神年月よもるゆた我麦をちりめて大和の南方残つくまは
 く伴ひるにまじく我むつびまこころし日志ももち喜む
 て夏も日を経くしとて初秋におもふさうしうのわたり
 此の坊の女興つを催しるももるわたりし
 是をなむせふ伴ひももるまきわたりしものありて我にかん
 て行へば定むれども爰も送別しとてわたりし
 柳居のわたりしとて先社麦をちりしとて柳居のわたりし
 柳居のわたりしとて先社麦をちりしとて柳居のわたりし

全楚歌風
 何事口
 温故
 温故
 温故

もつりて秋至る庵ふれ住て爰に風流とまのりんとん
 浮石其朝叶司若史吳雪巴村入楚なりと日々に今ん
 温故の麦浪ももるしとて會も
 け、柳居ももるしとて三足猿の一集と作り神も三足一句の
 猿と巻のせんといふ句あはれしひもてわたりし表ひとわたり
 先つてまのりぬ
 神風館のまのりぬとて疾わたりしとて己に病也と見えぬと
 き人もおもひぬとてわたりしとてわたりしとてわたりし
 ぬ仙乃の明を居しとて柳も
 とてわたりしとてぬくめとてわたりしとてわたりしとてわたりし
 も一巻はうらみちめぬ
 梅路寐ぬとてわたりしとてわたりしとてわたりしとてわたりし
 作を舟とて風人勤奇とてわたりしとてわたりしとてわたりし
 あらんと是より其先きとてわたりしとてわたりしとてわたりし

にも落^サあるい^ハ新にあ^リてま^ハにか^ハ表

さる^ハ二^冊乃^ハ中^間と^リく^ル俳^諧の^うま^きせ^らん^後に^生涯
の^俳諧^とま^のい^んと^もな^し唯^ある^のま^うなる^人情^もさ^らん
又^山の^にし^きま^いる^心を^とか^け合^せる^ことは^初心^初ま^れ
一^作に^した^と一^句と^成て^一巻^にな^らん^もか^らん^こ
ろ^と味^もな^し又^見て^変な^らん^又一^作と^ぬい^てよ^く牛
ぞ^めに^句と^見せ^らん^と唯^神登^乃奇^作の^こた^て風^情の
向^とた^まぬ^と一^度け^らぬ^後に^あれ^ふも^もひ^とさ^らぬ^又
い^んで^止ま^し今^生涯^に俳^諧と^云わ^れく^人情^の向^と
つ^とり^て唯^其ま^まと^見れ^ばか^らぬ^かれ^ば誰^もも^有
ま^らん^に徹^する^人上^とも^なら^ず何^れ其^作の^神登^の向^に
にも^ある^俳諧^の平^淡也^やと^いふ^もな^らず^から^ぬ
作^の二^冊の^間也^我ら^の社^中の^巻に^句を^撰ぶ^見る^は
昔^又は^今の^間に^ある^も長^くつ^まば^らん^間に^ある^もな^らず

同^ハ同
同^ハ同
同^ハ同

わん^新ころにま^まこ^こら^し其^句に

船^つま^とあ^られ^ばせ^まい^町に^成り

かく^れれ^人上^の手^拭が^入り

し^らし^らし^ら神^妙の^作にも^あら^ぬ唯^人上^のあ^らし^たら^へ
お^うけ^はあ^らし^凡人^乃剛^飯と^せば^新奇^の作^も年^は境
とい^て人^上は^夫ら^おつ^ぬる^れを^天地^つま^んは^人上^も
よ^く人^上畫^まん^ハ凡^雅と^不易^なら^ん昔^子ら^の愛^を
つ^まぶ^らい^とせ^し

し^らし^らし^らま^の月^やま^にか^んれ^ばさ^らな^は伊^賀の^山越^えと^あら^ず
と^すま^きれ^らし^とむ^ら枯^枝り^とこ^らん^とた^もい^おれ^お
こ^のあ^らし^ら

我^全味^にあ^らし^らま^ま麦^水と^云者^の俳^諧一^巻に

ま^まま^まの^ちも^も何^れも^あら^ずナ^ラシ

と^しら^しら^し希^因筆^と加^へて^まま^まに^ちら^しら^しる^金

城の風土の喜ひ此の詞妙也と云我も實とも思ひ返し
 が^今梅^枝の一^棒と得て風雅の境と志すに及んで
 あれにも^非なるを^非か^非も^非何^れも^非か^非く^非趣向乃句^ぞん^に
 薄分^れハ^ちち^う道^う也^と

ともべき出^の一字^ここ^ち也^すく^も句^勢此^園也^とや
 又其^すこの^やも^らび^んや^今も^ま林^の雅^境也^とし^る
 今^も金^城の^句の^すの^いと^こち^こく^語勢^のま^もら^ず
 さ^はば^句毎^ふか^らび^んの^味乃^すく^も我^希因^がた^の
 に^久く^もい^ぬハ^一時^にこ^の定^りん^を古^山が^亭
 にか^つり^て静^ろに^一條^の文^を作^り若^死か^もに^投り^こ
 に^希因^是と^んて^いかり^まこ^しは^した^にむ^月の^けの^文
 を^立て^絶た^文を^おく^らハ^かの^可鮮^か喜^ぬ所^をん
 又^まま^まの^便小^梅枝^故人^とま^まの^病の^末の^末
 た^のみ^かり^しと^を空^は便^く風^雅乃^火と^けら^る

此の級五世中森務海
 巻の四二二三段

やうにして去年のその比もたまいにしれと

雪折と見え一が笑うて塚の梅

山行紀 紀行かゝらう山

紀行かゝらう山

かま^和に櫻井と云所ちを談山^{カマ}に禁^{カマ}す^{カマ}が家と^{カマ}か
~~~~常~~~~布也醫師浴見と云人文に、かく詩にた<sup>カマ</sup>  
み多<sup>カマ</sup>が伊勢の風を聞て杜子美と<sup>カマ</sup>フセ<sup>カマ</sup>者<sup>カマ</sup>の羽也  
と云<sup>カマ</sup>麦林に到<sup>カマ</sup>て其<sup>カマ</sup>句を撰<sup>カマ</sup>る<sup>カマ</sup>て<sup>カマ</sup>りて<sup>カマ</sup>李王<sup>カマ</sup>を徒也我  
是<sup>カマ</sup>を<sup>カマ</sup>学<sup>カマ</sup>て<sup>カマ</sup>さん<sup>カマ</sup>やと<sup>カマ</sup>ま<sup>カマ</sup>る<sup>カマ</sup>に<sup>カマ</sup>同志<sup>カマ</sup>を<sup>カマ</sup>か<sup>カマ</sup>ら<sup>カマ</sup>ぬ<sup>カマ</sup>け<sup>カマ</sup>た<sup>カマ</sup>先<sup>カマ</sup>庵<sup>カマ</sup>作  
りて<sup>カマ</sup>て<sup>カマ</sup>に<sup>カマ</sup>雅<sup>カマ</sup>遊<sup>カマ</sup>す<sup>カマ</sup>地<sup>カマ</sup>を<sup>カマ</sup>定<sup>カマ</sup>め<sup>カマ</sup>ん<sup>カマ</sup>に<sup>カマ</sup>ち<sup>カマ</sup>ら<sup>カマ</sup>ん<sup>カマ</sup>と<sup>カマ</sup>り<sup>カマ</sup>ル<sup>カマ</sup>が<sup>カマ</sup>住<sup>カマ</sup>る<sup>カマ</sup>家  
の<sup>カマ</sup>し<sup>カマ</sup>ら<sup>カマ</sup>に<sup>カマ</sup>よく<sup>カマ</sup>晴<sup>カマ</sup>ま<sup>カマ</sup>所<sup>カマ</sup>あ<sup>カマ</sup>る<sup>カマ</sup>爰<sup>カマ</sup>に<sup>カマ</sup>定<sup>カマ</sup>む

け地<sup>カマ</sup>や<sup>カマ</sup>か<sup>カマ</sup>ふ<sup>カマ</sup>ふ<sup>カマ</sup>山<sup>カマ</sup>と<sup>カマ</sup>ら<sup>カマ</sup>に<sup>カマ</sup>置<sup>カマ</sup>て<sup>カマ</sup>東<sup>カマ</sup>の<sup>カマ</sup>初<sup>カマ</sup>瀬<sup>カマ</sup>山<sup>カマ</sup>高<sup>カマ</sup>ま<sup>カマ</sup>と<sup>カマ</sup>山<sup>カマ</sup>三  
輪<sup>カマ</sup>が<sup>カマ</sup>崎<sup>カマ</sup>も<sup>カマ</sup>わ<sup>カマ</sup>る<sup>カマ</sup>ち<sup>カマ</sup>か<sup>カマ</sup>く<sup>カマ</sup>み<sup>カマ</sup>か<sup>カマ</sup>み<sup>カマ</sup>の<sup>カマ</sup>山<sup>カマ</sup>も<sup>カマ</sup>も<sup>カマ</sup>ま<sup>カマ</sup>る<sup>カマ</sup>た<sup>カマ</sup>見<sup>カマ</sup>ル<sup>カマ</sup>は<sup>カマ</sup>と<sup>カマ</sup>西  
の<sup>カマ</sup>京<sup>カマ</sup>と<sup>カマ</sup>ら<sup>カマ</sup>る<sup>カマ</sup>寺<sup>カマ</sup>西<sup>カマ</sup>北<sup>カマ</sup>の<sup>カマ</sup>伊<sup>カマ</sup>勢<sup>カマ</sup>の<sup>カマ</sup>つ<sup>カマ</sup>ら<sup>カマ</sup>き<sup>カマ</sup>を<sup>カマ</sup>尽<sup>カマ</sup>して<sup>カマ</sup>龍<sup>カマ</sup>田<sup>カマ</sup>高<sup>カマ</sup>南<sup>カマ</sup>林<sup>カマ</sup>  
も<sup>カマ</sup>り<sup>カマ</sup>と<sup>カマ</sup>ち<sup>カマ</sup>ら<sup>カマ</sup>す<sup>カマ</sup>に<sup>カマ</sup>敵<sup>カマ</sup>干<sup>カマ</sup>山<sup>カマ</sup>耳<sup>カマ</sup>山<sup>カマ</sup>天<sup>カマ</sup>の<sup>カマ</sup>香<sup>カマ</sup>久<sup>カマ</sup>山<sup>カマ</sup>も<sup>カマ</sup>遠<sup>カマ</sup>か<sup>カマ</sup>ら<sup>カマ</sup>ね<sup>カマ</sup>  
い<sup>カマ</sup>づ<sup>カマ</sup>れ<sup>カマ</sup>も<sup>カマ</sup>古<sup>カマ</sup>都<sup>カマ</sup>の<sup>カマ</sup>あ<sup>カマ</sup>ら<sup>カマ</sup>と<sup>カマ</sup>も<sup>カマ</sup>る<sup>カマ</sup>れ<sup>カマ</sup>と<sup>カマ</sup>ら<sup>カマ</sup>る<sup>カマ</sup>所<sup>カマ</sup>と<sup>カマ</sup>ら<sup>カマ</sup>る<sup>カマ</sup>南<sup>カマ</sup>の<sup>カマ</sup>花<sup>カマ</sup>

ももやしと云はしどしと山へ五里もあらず水はいま  
きぬとてか女迎もちへらん

お我ハ柱たすまやうの物をとごらん秋をちのやもちてあ  
れ神も秋多くもちてあれとまかき志をくまへし地ッ活見  
せんぶしたまふお庵つくりをてらん後を庵主の

粟の飯ハわしく備に入てもちまてらんがと云者みま風  
流に心をまき友もまきとく

洛の百川まきあつたすまは繪ハ秋かくしとまきこへ  
たるころをまきと地は空何とちあつたひとく振笑出て  
桃梨山つとどしとまきあつて葉は花もくまかちま

にかみどしと人乃まきとまかせし百川相とまき  
先多武のなわの白里夫よりい道のたかおや  
五日ひくし雨は名跡ハ梢しめやうに日はかとうにけして  
細き花の木も若葉のみあからしむるころた

花の

花のかかりとまきとく咲文とくあは高キハ又雪のかかりたのや  
うにまきとくびて五里むかりのこ那とく金丸山もつぼり

てかおらあつたまきとくやとくまきとく雪あんなく北山を  
トウの也とまきとく田鶴もハおるん飛こて行へし

下市といふに川あつて渡る日のやつかむまきとくになとあ  
たうに照りて風せもあかぶ春乃水のみとくやうとく

たうとね打つるまきとく道も細をれと例う山樞はたな  
まきとくまきとくはにまきとく煙ハ葉乃花のこかねまきとく

浄土のやうにまきとく青くのびるまきとくかろや打け  
りたるまきとく二葉も昔たる家に飯まきとくまきとく

まくらせし前がう山水のまきとく水よいかぶら洗うもんか  
夫とく花乃小かけとまきとくねと  
居て見よとい日向の家や山まきとく  
ゆくちたにちまきとく山まきとくまきとくまきとく

ま

ふし野をらん又あやうくにうきふ山の腰三里わりり立な  
らひくるとま

山々くぐり一里ふれくして置にけき  
百りも句はあつくし

かくと花王臺にのちりて多居のまもるおぢぢあかりしのも  
とにやうら

我にさあかりしとまどい雪山ひらり雪内とつまのそん  
かまこつて樂阿孫とま旅の傍りころのまの杖笠のま

してけしふきこころあまびいこころまひしあまこころおまを  
きこころまらふいと浦山りかりしが終に道祖神のまめ

のまの伴ひまこころあまこころ一実つたおまの成一とおま  
おまこころまらふいと感情又むねにせまうて

花と見しをまもるまらふいとまらふいとまらふいと  
はらあまこころに長閑をらひし日暮るに山嵐あらう吹て

雪

雨の降ゆる表俄ふきうきうつ雪や降金しとおまぬ  
にませまのまらふいとまらふいと空のあれまを花よく散れ  
りヤンカヤせんとおまらふいと物とおまらふいとまらふいと  
手とあて、花さおやどいせ山

おの間によく降つまらふいと雪おいとまらふいとまらふいと  
へ埋れらるあまこころ詠も入んまらふいとまらふいとけかりし花の  
梢とも吹折したるまらふいと雪のかりたれを唯あらぬある  
まらふいとまらふいとまらふいと

雪のころへてけける梅うわ

ちもまらふいとまらふいと美花唯一時に吹落て冬のころち  
まらふいとまらふいとまらふいとまらふいとまらふいと  
まらふいと見せしとまらふいとまらふいとまらふいと  
まらふいとまらふいとまらふいとまらふいとまらふいと

百川うらへお雪もまらふいとまらふいとまらふいとまらふいと



よりも又深き水ハと云  
我いへるさするはすくてもお乃あがり水ハ教後にものす  
かりとおもふるやいとせ

主曰此山の修神を志せきみこらつおりーまん又より  
サかり見んことわくしとやん歌うむ人ハ物ハ書て残し  
たまふりとうや申せ実サさうは山ハのさうと云れとこ  
人もちぢんやうをく々ーきまて花さくーやとまちま  
けらる人ハもこころてけうやあをみんと云に一板の中  
にもおもひかけを盛り立てよ見たまひるさのこくこ  
サけらつとおもむ俄うに花ーてかりささひーま山乃こち  
は花をさきは修神乃るこら体サゆり惜ませたまふて  
人ハ長々見せましとまじまじやと雪ハ猶やまを牛の  
刺ハかりとやうりや味ハたぢもこちも唯白妙ヤルハ  
よりつと里よりやれさう雪ハさう歌のさうちになか

河部  
阿比

武蔵  
十津

175

かゝもへらん是ハ花見んとてサをうふとふくきつ水ハ  
人の何とおもひでたとまうて花乃影にあらせんともちが  
へぞ日の色サ一雲よりまれて梢乃雪みさうして花と落つ  
山の鳥とも唯我ものに花をぞろしこころが俄うにおと  
ろまこ立て飛り入り鳴らま猶のとうあふぬさうめあしし  
は、南帝サむうーもろわし皇女乃伝説をとよたにた  
とありわうてソーナハけらたに花もまぢく雪と  
もまぢく降埋れくる木もちもとの御むかり乃たくままひ  
りやあらんするはけ何くとも悉お敵乃蹄ふかりてちるん  
給ふ高車乃あときれ物のあるさまもひとかなん

尚ちらうて雪もみうーやあさう  
是より奥の院をおうめくうし西上人のむすいたまひ  
とくくの清水にて見れば雪たそけりてこころさう  
遣ふちとぬ表がてち又氷の柳

此日たぐくやうやくしるかたうくりて臥を冬のおれ  
やうにもまゝに水が薪たう火かいてあすの雪もけぬ  
日もあかしくしつとあつたは津のわらもれわくに落来て  
山風も吹くばあつたはわらもれつとあつたはわらもれつとあつたは  
わらもれつとあつたはわらもれつとあつたはわらもれつとあつたは  
わらもれつとあつたはわらもれつとあつたはわらもれつとあつたは

高取のち道ゆきしてさよふいとよき夕暮やうし  
りね橋井にわらもれつとあつたはわらもれつとあつたは  
わらもれつとあつたはわらもれつとあつたはわらもれつとあつたは  
わらもれつとあつたはわらもれつとあつたはわらもれつとあつたは  
わらもれつとあつたはわらもれつとあつたはわらもれつとあつたは  
わらもれつとあつたはわらもれつとあつたはわらもれつとあつたは  
わらもれつとあつたはわらもれつとあつたはわらもれつとあつたは

花先達

にせふしるんがと花工とくさつたものよる志うと舞いた  
が准のころはしつとあつたはわらもれつとあつたはわらもれつとあつたは  
わらもれつとあつたはわらもれつとあつたはわらもれつとあつたは  
わらもれつとあつたはわらもれつとあつたはわらもれつとあつたは  
わらもれつとあつたはわらもれつとあつたはわらもれつとあつたは  
わらもれつとあつたはわらもれつとあつたはわらもれつとあつたは

本や良の京より便あつて武山の百梅文一いかにわらもれつとあつたは  
わらもれつとあつたはわらもれつとあつたはわらもれつとあつたは  
わらもれつとあつたはわらもれつとあつたはわらもれつとあつたは  
わらもれつとあつたはわらもれつとあつたはわらもれつとあつたは  
わらもれつとあつたはわらもれつとあつたはわらもれつとあつたは  
わらもれつとあつたはわらもれつとあつたはわらもれつとあつたは

けまいたくしーかこせいしよまおきこしよあわりのかさな  
ぢしーうけしーやうしーいよんじを我々かたかりし  
時の名さく書そ久しー別れしよ姉やまもの文也金也金  
百梅申きーくもち

我々祖母のいむしー今年五月の日しよ水五月也五月の  
あふたかやうを車にかうしーしし相我母や人いむ  
とまものわが久しーきやくあしよで取りしよしよるこま  
舎り所もれしよすれどしよ水とどかり指すも若や其子  
其元にもせんあふばけしよ上ぬか下れしよん何のや後か  
唯な来りしよあふしよもよふ文も見しよしよつれしよ捨て  
東にもゆらぬしよん孝の道キヤウもしよ旅の具キ近しよへて百梅  
こころおしーくも也

しりこいじんばふ下やうの人なんとしよ水にも書きしよるも強た  
おさるうしし時別れしよ何しよ何しよ夢のやうにいぬ  
とおさくおかしーくむかしよものしよ入ふ見して唯ありし  
あふた鼻打かきしよこころ弱もけりしがさしよし此文の  
便にもうせしよしたしよも母や人のかたりにしよへて孝の  
みちいたつしよしよむかしよ塵の世の人しよしよ風流  
爰に書んしよふのまてや塵中の人しよんをむかしてや  
附境のやま人をぬらん我々こころ二つたしよく我身ま又ふ  
たしよにあらぬしよしよしよしよた眼と目しよしよ泣兒よ  
しよわしよしよかきしよしよしよしよのしよ細あふんまに二ど  
らでやあしよしよ孝キヤウのみちしよしよしよしよのあしよしよ  
入むぬ珍らしやしよしよ人の行末うぬしよあしよしよがしよしよ  
其つま二しよ人しよしよ親しよしよから年しよへてめくも逢ふ  
たましよしよむかしよ物しよしよしよかた人乃包二ど

まひらせてよき事にもたまはらうんがから尾信いたまらん  
こゝれいとこしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり  
いらすしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり  
しりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり

清見かきこえまらうまらうの申はけあんの風人によれて  
今宵我々亭に名残の物くしやまき入きまきまきまきまき  
たれも社友のしなちりきれしるはたまを赤らかくお  
もひくけがる別北やりしりしりしりしりしりしりしりしりしり  
ませんあまらうて風雅も是とあまらうあまらうあまらう  
身おのみをりぬてゆきしりしりしりしりしりしりしりしりしり  
夢見しりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり  
行にかきこえ山と流来た声のしりしりしりしりしりしりしりしり  
こころか母の人の別れをかくるあまらうあまらうあまらう  
らん夏布立しりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり

たぐの哀なるなり

はら何とるあはれしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり  
たぐの哀なるなりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり

物もつて彼ら山里ふあそふ所一七百梅枝  
いぶかりまこして何人なりしりしりしりしりしりしりしりしり  
はら何とるあはれしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり  
夫は壽永のころ西の國西の海まで公達にやあはれしりしり  
たぐの哀なるなりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり  
こゝれいとこしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり  
かゝるしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり  
しりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり  
しりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり

母の哀なるなりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり  
たぐの哀なるなりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり  
はら何とるあはれしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり

母の哀なるなりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり  
たぐの哀なるなりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり  
はら何とるあはれしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり





のも実此やまのクマノハシノクハ入る道と伴ふ人トシテ  
二日ばかりして洛見亭ナつく板かの東路にかへる  
もとみかふぬかりをばさううけるかざらふにこまりて  
はるまきの「吉」をらん別れをせよや古山百川うは  
かちちとよ同士のまきりて爰にあつまる僧坊にのかりつらば  
事の変りもむつかうんた、何とるき茶店に一切を  
あかすらんよかろくしと山の半ぶりに信人のあつて  
ひてあやしき物さみみきとすめてこころをわたり出  
行まよおもふよ唯里もなかりし

此家も山よくさかけてむげも埋れお蚊のこまふあつて  
蚊きりしきつしけらるしとせいで俄かよ何れはにい  
のこはさらんお半うるぶきううこへかよふ虎文と云  
者けりてこへて四五丁ゆうが物さあまら庵もてあつて  
とよゆべーやとちよ同ふてかの俄かよやどらんかあ

人のまふもあつて物さあつたのあつてこころい  
ひて出る百川うらうらうりて我が爰に寐てやあつてきこ  
えを東梅とつちのこもおなごこににいして唯眠たかう  
いままたあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
此道うら道と案内も虎文さく迷ひて果はいだらうの中  
にひりかかへるくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
川よくこりてつぎ洗ふまはるんやくせまけりさんと云も  
洛見なるしうばとせ似ておかりうんあなあやしおん  
の道と爰かこせどらん虎文は狐さうさういひ出ると  
あや<sup>怪</sup>き火の光りさへんから爰なるはまて入るあつて  
僧はけやと病と臥してあつてうらば薬ありあつてあつて  
こころ虎文入して中つらとせまてさつていもやけて爰は  
食らん晴るる所也といへば東梅さくせまてあつてあつて  
んよき所あつてのあつてせよ老さらがふとる人乃我が美

少年也サウニヤしシとトいイんンぐグとトいイふフ物モノをヲわヲらラるル事コトおオこコし  
 たタらラせセるル事コト也ヤとト先マツ益キもモ上ウるルにニ川カハのノ音ネもモ禁キに  
 キキニニ和ニ北キ風フエもモりリとトふフかカらラねネむム實マコトまマくク晴ハルるル所トコロにニ人ヒト  
 立タまタりリてテふフ見ミんンとトてテ一ヒト免マカてテ矢ヤふフ百ヒャク川カハをヲ淋シらシりリて  
 何ナニぞゾあアらラむム女メノコ事コト目メやヤ水ミヅのノおオとトおオらラ風カゼもモ高タカたタてテもモキキけケりリ  
 りリらラ山ヤマ乃ノけケもモまマくクまマんンハハキキんンがガかカらラいイ庵アトのノあ  
アらラいイがガおオまマりリたタるル声コエをヲ多オホシくクもモてテ酒サケのノまマがガ  
 一ヒト言コトはハ人ヒトもモ眠ネムりリ出デてテ句クもモ言コトへヘとト云イハれレ虎キウ文ブンもモちチはハらラ立タ  
 寐ネムりリをヲあアらラむム伴トモにニ成ナりリてテ何ナニぞゾかカらラいイとト言イハれレ庵アト主ヌシのノおオぢぢにニ  
 起オキるル声コエ也ヤとトわワらラせセるル又マタ小コよヨうウ一ヒトてテ鼻ハナのノあアらラるルこコえ  
 らラるル物モノをヲあアらラむム事コトもモ今イマ夢ユメ人ヒトをヲ物モノかカりリ  
 くだクダすスとト云イハれレおオぢぢもモ人ヒトをヲ見ミるルやヤあアらラるル事コトもモ志シがガハハ矢ヤふフ

びビらラあアらラるル物モノはハ山ヤマ侍シどドとトいイふフ物モノにニぞゾとト云イハれレ誰ナニやヤん  
 好オモいイるル人ヒトのノここととばばななららぬぬ事コトとトいイふフ物モノはハ見ミ入イりリぬぬ事コトからラ  
 にニ火ヒのノ油アブもモつつききてテままくくけけちちのノ光ヒカリもモりリななららずず  
 果ツけケちチりリのノ爰コノもモ寺テラのノ鐘カネはハななくくてテ山ヤマのノ寺テラもモ此ココ鐘カネ  
 をヲままくくにはハやヤ五イ板ツもモ過アりリたタらラかかつつてテままととみみななをヲととりり  
 やヤららぬぬ物モノかからラいイてテ枕マクラにニぐぐままれれたたらら今イマのノおおぢぢのノおおぢぢがガああららははららいいてテ  
 かかももいいるルやヤららぬぬ物モノのノ新アタめメせせるルがガかかららいいてテいいふフ事コトもモ  
 ききすスにニもモああららぬぬでで涙ナミのノわわららいいとといいふフ事コトもモいいふフ事コトもモ  
 ふフ一ヒト部ベろロをヲししりりてテああららむム事コトもモいいふフ事コトもモ  
 とと我ガとと虎ク文ブンささくくももいいふフ事コトもモいいふフ事コトもモ  
 ぬぬももいいふフ事コトもモいいふフ事コトもモいいふフ事コトもモ  
 けけがガのノかかららいいてテ上ウのノ向ムカひヒをヲああららむム事コトもモいいふフ事コトもモ  
 てテいいふフ事コトもモいいふフ事コトもモいいふフ事コトもモ  
 けけのノ代ダイ丈サハにてテとといいふフ事コトもモいいふフ事コトもモ  
廿二







廿二日

はらへんちやうしりかよあふんまむかしのうらたかへ  
て物せよそれこたにこれとあはれあふん入水と我佛中の隠  
士にてたまごでいふく〜伏よもあふん唯わかろし  
かよめとは音也か遠き風の行脚と信みも定ぞ  
へめ〜春いたれを其るけ〜も唯時〜先百梅  
ころへてあるこのひだご〜と遠くあそび〜  
申すこ〜ふたたびすにやあふんとあせど〜すぐよこ  
だもさく〜か〜たま〜お別れ  
そのちり百梅が娘と〜と〜もの〜が〜  
や〜

百梅も〜らて金我山のうらも〜寺乃内よ先ッ庵  
〜容〜

或時百梅相〜と〜柳岳乃會堂に〜かのた  
か〜

延享四年八月

吸露庵

雷門・因・  
涼装ト云マ

吐花門琴も〜思ふ

百梅いげ〜人いたの〜武山に帰る葉  
月のけ〜を〜

かくても木蘭の露 露秋菊の海英あつてんねタ  
ころのあ〜も〜又吸露庵とちろ〜

物かけも〜音あ〜  
名月に埋れてひ〜草乃庵

並木と云町屋は観世音のちよ〜にてむか〜  
比々並木の杉〜り〜は〜と〜  
かゆ〜風雅と〜とあれと我〜解落りまわにハ  
あらむ

あふれ和鳴々云々の〜し〜て雅淡さる〜に和  
鳴り〜

武州深谷清心寺  
忠を振

東武なる〜のあ〜に忠度の櫻とあ〜我徒  
廿九

桐原といふもの句也

蝶のうらみとてはさるる櫻かゆ

予曰我風流ハもて人に入らばこゝねをいふ我に  
にさうたまきんは句に我一人の句にて猶や  
雅と云者は夢にてもめ人の句にて猶や  
人もおもむきと得る人オもあるべし先翁の句に  
かまきりの組てはさるるぬりこめ

是をもて風雅の板を見よて端郷はものまはひあり  
ことよらむべきうらみとて車にむらや斧かありて  
たむけある草の葉末につまきと奉べきちりて  
もろまぬりて安に落しはさるる身のおえけれ  
はさるるのうらみは宜し梅の花散りてはさるる  
次もかく見方はとも櫻は秋の散りてはさるる  
蝶のたもやうやうやうも櫻も散りてはさるる

執りてはさるる蝶のうらみとてはさるる  
意しか入むすづ板のけとて和鳥頭と叩  
て曰高論何ぞはさるる又かく云句あり

聲ハ餘りかゝぬまのやちとまきん

予曰是死句也凡雅は先とてはさるる  
出せよものも其筆力の妙に至り何ぞ其言のたまを  
たりん唯魂の所ナ有てはさるる  
もは作者のたちもちやとまきんたし  
午声のこゝもまきりつべし和鳴おとらいて其  
段と向て予曰我流の筆如にふけるかのことまきり唯常也

音を餘りに明いてありやとてはさるる

といふといふ和鳴自失て曰俳諧かく神妙なる我いま  
其あることとてはさるる二三友とすめまきり人といひ  
出があらうちのまきりてはさるる

秋午三把りもきこへて若きおのこもぞんとよまはる  
もつにて雅男又澤うりしる日ありむは境をさしと  
我流にすゝんとして

は、陽田川乃あふちのき五百崎に庵つくりて淳  
庵といへる庵まの麦譽とて我まき人ぞし日に我  
をとらてせらふこりよたまへる

又並木に信りる冠子きこるかの句を雅せ桐原もき  
たる備桂は所居の司をる人也おれくまへ南壽  
午歩やも此あふりにしよいくまへる桂雲も立くをり  
てなあはとこのあふ

柳居は花門琴きこりて或日會也

鳥醉もきこれ

おねる梅伊勢の岸虎より得て暮林會に初會の會  
もてりしを我かりそめを板りて柳居に板のとを沙汰す

く、題して續新百韻と云東門子乞得て梓行也

其のうち柳居とたりここのりてきて交りと絶り

菊月のこりめ武山にゆへ

寄居の兎雪を雙飛と改め宗訓伊山と名付羽月  
駈せし勤たに門に入ては雅誼をうへん  
双飛子とてあひこり

人乃親れ雲にむせらふ十三お



|    |     |  |
|----|-----|--|
| 1  | ... |  |
| 2  | ... |  |
| 3  | ... |  |
| 4  | ... |  |
| 5  | ... |  |
| 6  | ... |  |
| 7  | ... |  |
| 8  | ... |  |
| 9  | ... |  |
| 10 | ... |  |
| 11 | ... |  |

11

|    |     |  |
|----|-----|--|
| 1  | ... |  |
| 2  | ... |  |
| 3  | ... |  |
| 4  | ... |  |
| 5  | ... |  |
| 6  | ... |  |
| 7  | ... |  |
| 8  | ... |  |
| 9  | ... |  |
| 10 | ... |  |
| 11 | ... |  |

海軍

|      |     |    |      |
|------|-----|----|------|
| 1842 | 1   | 海軍 | 1842 |
| 1843 | 2   | 海軍 | 1843 |
| 1844 | 3   | 海軍 | 1844 |
| 1845 | 4   | 海軍 | 1845 |
| 1846 | 5   | 海軍 | 1846 |
| 1847 | 6   | 海軍 | 1847 |
| 1848 | 7   | 海軍 | 1848 |
| 1849 | 8   | 海軍 | 1849 |
| 1850 | 9   | 海軍 | 1850 |
| 1851 | 10  | 海軍 | 1851 |
| 1852 | 11  | 海軍 | 1852 |
| 1853 | 12  | 海軍 | 1853 |
| 1854 | 13  | 海軍 | 1854 |
| 1855 | 14  | 海軍 | 1855 |
| 1856 | 15  | 海軍 | 1856 |
| 1857 | 16  | 海軍 | 1857 |
| 1858 | 17  | 海軍 | 1858 |
| 1859 | 18  | 海軍 | 1859 |
| 1860 | 19  | 海軍 | 1860 |
| 1861 | 20  | 海軍 | 1861 |
| 1862 | 21  | 海軍 | 1862 |
| 1863 | 22  | 海軍 | 1863 |
| 1864 | 23  | 海軍 | 1864 |
| 1865 | 24  | 海軍 | 1865 |
| 1866 | 25  | 海軍 | 1866 |
| 1867 | 26  | 海軍 | 1867 |
| 1868 | 27  | 海軍 | 1868 |
| 1869 | 28  | 海軍 | 1869 |
| 1870 | 29  | 海軍 | 1870 |
| 1871 | 30  | 海軍 | 1871 |
| 1872 | 31  | 海軍 | 1872 |
| 1873 | 32  | 海軍 | 1873 |
| 1874 | 33  | 海軍 | 1874 |
| 1875 | 34  | 海軍 | 1875 |
| 1876 | 35  | 海軍 | 1876 |
| 1877 | 36  | 海軍 | 1877 |
| 1878 | 37  | 海軍 | 1878 |
| 1879 | 38  | 海軍 | 1879 |
| 1880 | 39  | 海軍 | 1880 |
| 1881 | 40  | 海軍 | 1881 |
| 1882 | 41  | 海軍 | 1882 |
| 1883 | 42  | 海軍 | 1883 |
| 1884 | 43  | 海軍 | 1884 |
| 1885 | 44  | 海軍 | 1885 |
| 1886 | 45  | 海軍 | 1886 |
| 1887 | 46  | 海軍 | 1887 |
| 1888 | 47  | 海軍 | 1888 |
| 1889 | 48  | 海軍 | 1889 |
| 1890 | 49  | 海軍 | 1890 |
| 1891 | 50  | 海軍 | 1891 |
| 1892 | 51  | 海軍 | 1892 |
| 1893 | 52  | 海軍 | 1893 |
| 1894 | 53  | 海軍 | 1894 |
| 1895 | 54  | 海軍 | 1895 |
| 1896 | 55  | 海軍 | 1896 |
| 1897 | 56  | 海軍 | 1897 |
| 1898 | 57  | 海軍 | 1898 |
| 1899 | 58  | 海軍 | 1899 |
| 1900 | 59  | 海軍 | 1900 |
| 1901 | 60  | 海軍 | 1901 |
| 1902 | 61  | 海軍 | 1902 |
| 1903 | 62  | 海軍 | 1903 |
| 1904 | 63  | 海軍 | 1904 |
| 1905 | 64  | 海軍 | 1905 |
| 1906 | 65  | 海軍 | 1906 |
| 1907 | 66  | 海軍 | 1907 |
| 1908 | 67  | 海軍 | 1908 |
| 1909 | 68  | 海軍 | 1909 |
| 1910 | 69  | 海軍 | 1910 |
| 1911 | 70  | 海軍 | 1911 |
| 1912 | 71  | 海軍 | 1912 |
| 1913 | 72  | 海軍 | 1913 |
| 1914 | 73  | 海軍 | 1914 |
| 1915 | 74  | 海軍 | 1915 |
| 1916 | 75  | 海軍 | 1916 |
| 1917 | 76  | 海軍 | 1917 |
| 1918 | 77  | 海軍 | 1918 |
| 1919 | 78  | 海軍 | 1919 |
| 1920 | 79  | 海軍 | 1920 |
| 1921 | 80  | 海軍 | 1921 |
| 1922 | 81  | 海軍 | 1922 |
| 1923 | 82  | 海軍 | 1923 |
| 1924 | 83  | 海軍 | 1924 |
| 1925 | 84  | 海軍 | 1925 |
| 1926 | 85  | 海軍 | 1926 |
| 1927 | 86  | 海軍 | 1927 |
| 1928 | 87  | 海軍 | 1928 |
| 1929 | 88  | 海軍 | 1929 |
| 1930 | 89  | 海軍 | 1930 |
| 1931 | 90  | 海軍 | 1931 |
| 1932 | 91  | 海軍 | 1932 |
| 1933 | 92  | 海軍 | 1933 |
| 1934 | 93  | 海軍 | 1934 |
| 1935 | 94  | 海軍 | 1935 |
| 1936 | 95  | 海軍 | 1936 |
| 1937 | 96  | 海軍 | 1937 |
| 1938 | 97  | 海軍 | 1938 |
| 1939 | 98  | 海軍 | 1939 |
| 1940 | 99  | 海軍 | 1940 |
| 1941 | 100 | 海軍 | 1941 |

### 紀行東山

百梅いたわりおちしきこし田菊水寺の  
 うーしつらで先ッテ産野もぐわくさるかともんさうりしん  
 たんこつを月しつし身まくりぬわくしてあまおたの  
 世をちやうすへかりしとちあつたにありん人のかみ  
 十三いふうの産野もぐわくよく身をちさちりし風雅乃  
 名さへ半やうで愛ちうせけるこころのは井ちかかろこころ  
 ちいしつし物しちさんしとちやうしつ物のめかこころのちつたに  
 おぢのけしむんもちてあししがたうくちまむにかかり  
 日もあまうにいふこも是もあまぬまうはせのちりんとり  
 所ふがせけんやうにて何いひ出へくもあらだちしき  
 野・やうしつしん  
 夏女頃百梅もふして忍はず乃ちりしにあそび一時

三十一日  
 三十二日  
 三十三日  
 三十四日  
 三十五日



とありし岸やをりて蓮の花  
とありしをたぎりて

し島の泥に末ぬ日や蓮の花

とありしにのちありし句也  
清き水の上に一蓮の花  
の一章を我しとやうに  
兄がる 砂上りていふ公せて  
坂のさしに彫入る建つる

大痛庵の主可登せきたに  
いふに 砂上りていふ公せて  
はつと赤の頭にも成りし  
母をたもてかたむけ  
ちとれはゆきて世のこと  
も定めりていふ公せて  
物たはらせありし人  
のありしにありしは百梅  
もあらしとよみありし  
たけの母をたもてかたむけ  
人の上とたなりて  
我と妹をたもてかたむけ  
行きかたは事やわが  
不定世累とは何れ  
はけしとよみありし  
たけの母をたもてかたむけ

キニゆるちとたてし  
たけは涙わらふ

玉水も軒につまくら十たうか

追悼の集りし  
沙汰してありし  
夕唯物乃たらし  
とよみありし

座のほむむ比やハ春夜乃雨

けちうに 禅院のありし  
住侶は薄之と  
キニて我た  
風雅  
とよみありし

伐くへ佛も多し  
冬もいそ

いとよむ  
くても古寺也

とありし人乃墓も  
あきとて寺院に  
ありしとよみありし  
たのく句も  
ありし

こまこ文の極も  
枯柳

けりし人  
くとも  
まらふ  
人のあき  
あきとて  
たのこ  
とけりし  
文へ  
たら  
あれど  
雅友ハ  
何すくも  
あ

らねて唯風流のそねらん

まき野やなまら山いんて宮まらま

かくて或まかへして又雙寄居飛鳥にやとる一や折か山かい

とくもそらんあはれ後もあやうたもひひるま子ナハハハ

らひいれむたやうささうさにて唯閑うひまう

埋火や夜着にかきまう筆の音

伊山が新室と賀して

新しきまきさや山春あかすう葉

野牛とや所々雅とこのむ者あつて秋門に入虎国と云

双飛伊山虎国いひむつて予う

帆やとす山さうさうかへり花

とくまをくつきて百韻と集まづしと云いせたあう

時の物うらうとも書てとらせーが秋霜月の未波露鹿

はかへまらるる山さうさうさうさうさうさうさうさうさう

伊山が賀

山さうさ

かくしらるるに雅友日々にまてうて風雅ととや又た

の

年

目にひとくゆるぬとあり雪うね二

ンせの雁路まき神風館のむうかきもいひむつべし

年内立春

お春うら直に居るやらとこれ内

こく北春大和の蝶角去路阿坡もまきまき茶亭とまて

あはれとつうへのすにいとまきうて庵にまきこらん

いよつ志山伊山の文こく四國のり脚をまきむ

奥田をたかりし医師を桐原わたるなうが我信あてう

くも西のかた信うて有り一日向ふにあいさうまらえ

留まに我さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

はつら風雅とまきうて我門へ入る李趙と云はれ後

寛延元年戊辰  
三月廿七日

いせまの煙  
葉桂堂 栢村宗亭

續三正孫  
元年九月廿

麦畑の集と板す叢桂堂是とひた  
かゝ栢跡おまひたてし三正孫の集ついにたふしと  
たまひおて今我社中つ句とあひすた百員でまた  
北む續ノ一子を蒙りめて集るとい叢桂堂はて板とを  
浮臺庵の麦響ニカとりと云集と板すは、南北新話とふ  
ものやあてしせつ風流をこりークんとす叢桂堂又板  
とち卯月桐原と携へてかま<sup>鎌倉</sup>山にゆくお根ノ温泉  
にもおゆく

鶴ヶ岡八幡

下 浮一<sup>下</sup>や種<sup>下</sup>のちる水も雪北下

能見む

上 遠ありく望<sup>上</sup>の遠目やかつ<sup>上</sup>つと

いせまの煙 葉桂堂 栢村宗亭

いせまの煙 葉桂堂 栢村宗亭

連長寺

ちつう<sup>上</sup>や寺と夏書<sup>上</sup>の筆<sup>上</sup>の音

長谷寺

け寺も釣鐘青一若 楓

江のーま

汎先に波より寄て涼<sup>上</sup>とる

鳴らう沈

つぬか<sup>上</sup>立鳥さへ麦に秋乃くま

相根乃ゆもし

温泉の祈<sup>上</sup>の咽や嘲<sup>上</sup>て雨蛙

方<sup>上</sup>の川原

萍や影積<sup>上</sup>にま<sup>上</sup>ルニ子山

勇我兄弟の塚

巻狩の道<sup>上</sup>や忘れ<sup>上</sup>す<sup>上</sup>う<sup>上</sup>か草

箱根権現にもうさ

うざ清や繪馬のほこせは蝶も

秋信いづみ金山やまの庵いむらはあまうに夏なつまうて人のやまうむ  
つかいり水みづを人にわづりて並木ならぎの所にやううとらうつん

冠子かんざしのせに行いときこへるに

着きてかへるに拾ひろりん月つき日ひ貝かい

はやよみおもしろいよかこのあつと源氏物語げんじものがたりなる馬うまにた

いせて戸と移うつ川のあつちうき涼すずを草くさにこころさうりこ

のこ花はならんざうし卯月うづき半はんソそてきの水みづかへつ稿こうを風雅ふうが

艶えん談だんとらト艶えん談だんとらト艶えん談だんとらト艶えん談だんとらト

買かひの金城きんじやうの麦水むぎみづやまの吉山きちやまと東行とうぎやうの

武ぶ出しゅの風人ふうじん又またきまらぬあまの山やまを東行とうぎやうの

秋あきも葉は月つきさうらうさうらうののもまもまもまもまもまもまもまもまもまもまもまも

箱根

華はなのの雷らい門もん南なん

浅草せんそう並木ならぎ町まち後ご向むかを  
得えるを羨うらやむまうらう  
冠かん子ざし

寛延かんえん三年

Wakkyou

Wakkyou

退俗

いにせぬ是これうん世よののとらうらうをととソそててんんふふへへくくままああら  
むむををたたるる母ははのの唯ただひひせせよよたたののととららくくききここししちちんん今いまもも我われ  
世よおおここへへきき時ときぞぞんん定さだめめて

楚雲そくもががるるもものの執とかかにももううぞぞととままここへへいいたたととままららて

せせららふふ行いくくももししううけけをを

是こゝららまま武ぶ山さんののととままかかととももととららいいてて志しばばししととららううににも

ああくく

大踏おほききここううてて双すう飛ひ真まにに含くみみはは我われをを武ぶににかかへへりり彼かを

秋父あきのの山やまああくく行いくく

芋いものの草くさああめめ脊せ中ちゆう今いませせややねね流りゅう

ははのの種こゝろ友ともけけりりととららくくこころろををああつつせせてて風かぜ雅みやびははけけりりととららとと

したしたここのの似にれれんんどどかかのの面おもて々々異いななるるここととくくゆゆららふふ曲まが水みづのの

ものものありありここのの似にれれんんどどかかのの面おもて々々異いななるるここととくくゆゆららふふ曲まが水みづのの

秋あきもも又またああららううんんけけおおううくく興きようアアいいままののややままににままて

ソラ〜にた〜このや種瓢  
秋の空ころよく晴てたうき旅寐しんを便り  
ゆいし穂たるころふがうて世のちくも添ぬき  
まゝのや

桑名に門人柳戸、親しきもの位にういさうとらて  
やとつ百川もきこつてあは

是より道の連は別れてソセにもあで秋の百川伴りて  
川舟にうり美濃國岐阜にゆく秋の川と鴉飼舟今

もゆき〜云々  
鴉頭乃影消てから鴉舟うや

是より近江の國高宮なるあたりに〜のま〜うあけまら  
いものちうに画さうのたをあしうは百川を〜めて物の

まへし〜云々移し日と経て〜あしうが菊月か〜の京  
は出た三井寺にのち〜

葡萄の〜狂うてまや十三夜

七尾岩城司野

楚雲い勢路を経て字に出た吉山又春、結登乃司鱸  
浪花にちりしが是ものちりま〜

爰に風流の交りとも〜べき友とちの旅寐するを唯人中  
の塵に落て遠き志をいへんべきたもい立ちん〜

稚の事た〜せ果て秋何ぞさ〜うん〜わの東山に妓  
を携へて新更科の月おもしろ〜と云程つれも好き

たふかの〜こ〜もにて佛中の隱きとま〜こ〜と瘦法師さん  
志かり何ぞおの〜こ〜の衣なき玉のさう〜つ〜と笑ひもし

もや〜とんと傲〜とらめま〜立て〜夢の中〜に夢〜てふ  
ものな〜た〜初〜ん〜實に是ま〜定りあきせ〜ら〜ら〜い〜

我是より風雅とわ〜りて心裡の見雅〜筆上の雅也と

の〜里馬をま〜ろ〜〜〜に〜ら〜りて明の伯虎が市中

の風流を志し<sup>慕</sup>しやうと<sup>た</sup>雅友を<sup>お</sup>とろきさえて深く<sup>木</sup>  
ま<sup>魂</sup>やう<sup>心</sup>廿見入るるこころ<sup>心</sup>を<sup>れ</sup>み<sup>れ</sup>たるも<sup>本</sup>李<sup>趙</sup>を<sup>も</sup>し<sup>り</sup>  
う<sup>疎</sup>と<sup>み</sup>ま<sup>き</sup>こ<sup>ゆ</sup>も<sup>何</sup>く<sup>し</sup>

武<sup>る</sup>冠<sup>子</sup>ひ<sup>し</sup>し<sup>し</sup>志<sup>を</sup>ゆ<sup>て</sup>父<sup>り</sup>を<sup>か</sup>こ<sup>を</sup>武<sup>山</sup>の<sup>双</sup>飛<sup>々</sup>  
徒<sup>も</sup>又<sup>ち</sup>か<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>

安井のあ<sup>ら</sup>う<sup>ち</sup>かく<sup>住</sup>る<sup>人</sup>あり<sup>自</sup>う<sup>鹿</sup>洞<sup>真</sup>人<sup>と</sup>云<sup>彼</sup>身<sup>は</sup>  
浪花<sup>の</sup>人<sup>に</sup>ま<sup>ん</sup>あ<sup>ら</sup>う<sup>東</sup>山<sup>の</sup>松<sup>隠</sup>の<sup>賦</sup>を<sup>作</sup>つ<sup>て</sup>業<sup>桂</sup>  
の<sup>も</sup>と<sup>に</sup>友<sup>を</sup>む<sup>す</sup>ん<sup>と</sup>定<sup>め</sup>る<sup>に</sup>行<sup>く</sup>も<sup>の</sup>其<sup>志</sup>を<sup>得</sup>が<sup>ら</sup>  
は<sup>白</sup>眼<sup>に</sup>し<sup>て</sup>對<sup>ふ</sup>と<sup>ま</sup>こ<sup>こ</sup>へ<sup>る</sup>り<sup>と</sup>高<sup>け</sup>水<sup>と</sup>あ<sup>る</sup>自<sup>内</sup>  
ま<sup>て</sup>見<sup>お</sup>か<sup>り</sup>や<sup>組</sup>し<sup>る</sup>あ<sup>ら</sup>う<sup>人</sup>野<sup>人</sup>の<sup>集</sup>り<sup>居</sup>て<sup>あ</sup>る<sup>か</sup>  
ハ<sup>琴</sup>を<sup>抱</sup>ひ<sup>て</sup>松<sup>風</sup>の<sup>も</sup>と<sup>に</sup>眠<sup>り</sup>或<sup>を</sup>蕭<sup>を</sup>吹<sup>て</sup>夕<sup>月</sup>の<sup>影</sup>  
影<sup>に</sup>う<sup>そ</sup>く<sup>い</sup>ふ<sup>と</sup>清<sup>談</sup>に<sup>し</sup>て<sup>俗</sup>を<sup>か</sup>ら<sup>う</sup>を<sup>我</sup>ら<sup>の</sup>  
青<sup>眼</sup>の<sup>人</sup>と<sup>て</sup>や<sup>う</sup>し<sup>た</sup>れ<sup>て</sup>俚<sup>し</sup>ぬ  
友<sup>に</sup>青<sup>山</sup>と<sup>い</sup>ふ<sup>も</sup>の<sup>あ</sup>ら<sup>う</sup>火<sup>ハ</sup>匠<sup>た</sup>た<sup>く</sup>み<sup>に</sup>し<sup>て</sup>市<sup>井</sup>に

業<sup>と</sup>す<sup>る</sup>を<sup>杖</sup>に<sup>ま</sup>して<sup>人</sup>何<sup>ぞ</sup>や<sup>病</sup>の<sup>奴</sup>と<sup>成</sup>り<sup>て</sup>東<sup>西</sup>  
に<sup>早</sup>々<sup>と</sup>う<sup>ら</sup>ん<sup>と</sup>笑<sup>ひ</sup>の<sup>り</sup>し<sup>り</sup>け<sup>れ</sup>水<sup>を</sup>か<sup>ね</sup>て<sup>俗</sup>中<sup>の</sup>志<sup>を</sup>  
く<sup>さ</sup>り<sup>ま</sup>り<sup>曲</sup>々<sup>た</sup>つ<sup>た</sup>の<sup>心</sup>成<sup>り</sup>を<sup>俄</sup>々に<sup>の</sup>び<sup>ん</sup>と<sup>し</sup>成<sup>り</sup>  
と<sup>和</sup>が<sup>り</sup>七<sup>を</sup>折<sup>て</sup>准<sup>一</sup>管<sup>を</sup>ふ<sup>く</sup>こ<sup>ろ</sup>に<sup>し</sup>て<sup>杖</sup>と<sup>伴</sup>ひ<sup>て</sup>  
鹿<sup>洞</sup>に<sup>こ</sup>ま<sup>る</sup>

湖倉探  
いづれも山に雲を巻くは  
いづれも山に雲を巻くは  
いづれも山に雲を巻くは

三十一

紀行浦つゝし

年かへりたる伊豫の志山と云ふるに我をむかひきこ  
はる長崎に芝山といふものありか小倉和歌の道にこへて  
日のもりのかきうた見めぐりて其道乃終りともきりめ  
雲の上人よも文りのゆききこへたよへる武の冠子がも  
とにかうしてあしよよく我もあつてひとをばと長崎の  
行脚ももやうしうさばもき道れちとやうと先ッ志山  
のかりたつねくいふとと沙汰とともなき旅寝るれがや  
まじしの名残とすことにてあつばきこへる人こそ問ふ  
はるかすれはあきこへるし筆上の雑々又心理にも  
かへまきききあつた

寛文三十二年  
三月二日  
長崎市南原町  
太田三郎

心づきしよれ吉都とたつぬて  
塵こぼして在の果にも涙のわ

千代八巻 本良在  
光侍る

千代せの塚と市

少あし梅不道すし塚乃ま  
片之陰の隠士とくらめて

予に脱神まきき一雄士の夢

法隆寺のありに周齋ときこころ人々和歌の志と  
ホキておろしく伝せしる人もむかしも交りしはこころ

花かく凡植こえて軒乃松

途中の吟

行くちにかさくね蝶乃草むきん

葺の能

僧とまの一新に空しありころも

やいび送別の友どちと見ふにかまひお事も多かたし

は別れ我古葉ししわくまきん

伏見のわたしの心はなほあはれなればはなればはなれば

まき桃ふ酔いん伏見のわく守

高福寺

通天乃雲とわく水と涅槃苑

誓願ち

紅梅や夕暮の空と遠くうらみ

はく夏にも飲りて諍言の床あり北ちのきこころ鹿洞の主人

浪をたのへるこころいできて関帳の夜にむせしきこころ

青山いより東山ふとまき彼も亦唐寅が買画にやらぬ

我の凡雅の志をわくしこころ夏に四國の旅探といききて

先浪をまきしこころ

五月末の九日いよの國をかへる舟あまきこころいとおく

いそぐ川口と水と添ふてくく行みちあぢつらう

空はつこもりるんが日暮しつらんふあつて梅雨のおやこも定

りなると人家遠く立ちりれて堤十丁がかり草のぬり

千代八巻 本良在  
光侍る





紅家 鞍懸

舟

尾止乃鐘におえひもよううで唯岩の鳴りひいて舟を  
くづがへし人を呑んといかり来波あるん洞と見せ峰  
と作りておとらかりやうも船子とこもしせば立あかりて  
船拍子をもろくさくむかへたさすうも波はすくと別れて  
西北に物こそ見われありぬ漕つうんとあせるとやうで江島  
くらかけとらうもなすし度らいとむつかき灘をのりて  
こへなまこらうもなすしとらうちを淡のかりきたたくて  
笠を着きもさふきにむらぬ高砂をさめくもさく我の  
ねてかゝるしとおもへたたさうもさくことにおち入る別た  
人と身をもまて天にのりてかきまめ舟の舟の舟の舟  
さつとて舟をもさめくもさくもさくもさくもさくもさく  
さあ物かともおもひてさくもさくもさくもさくもさくも  
さあ空もさくもさくもさくもさくもさくもさくもさくも  
おほいぬもあなたたうともさくもさくもさくもさくもさくも

六月朔 氷祝日

是れん江島の津とよかすし打木とちか水におき出る水  
えのう会仕人なめだありと云ふ我ちと物をどす物もさ  
日ころと裡のわがさすしと云ふさくもさくもさくもさくも  
とおもひいこふ我あがらおそれとへんよりへと老たる人  
有くて滅道と云ふものはおそるといふ我ちいよく志  
さむらよ音子がは舟たおける三歳の芥見に似せうとて  
笑ふ

ありし舟舟やころれ氷室守

あれし野分のついでこのとくいこい濡るも舟もさくは湊  
いくつもかこりておのがさくさくつあへりさふは強更にあ  
風の雲のあしおとらうし度のおとらう漕をみれおあやう  
かりし物をまことにけさわおとらうぬらなりや氷いさふ  
日として干せる餅いこやととりてお茶茶こころよくむし  
ねのちとな風さすふあとしてありし所とやらぞさくめはいふ

せくもめつらうきしかつてあすきもあつねかやまおまふ  
さては島は高しすめきて入江磯山小おらるる世もていけ  
人家かぞゆるむかひにあかき藪かふりうらる海ともの  
男も見へてかりつものーッ、もてきてうらる船にうらるる  
岩に尻うけしていそ、釣とすと給ふよくも似しるるこれ  
か此見あつて申の刻むかひもさぶーッうらる日相見ん  
とていかり引あつツ、漕出せも海いたうらるる  
山つたけけりうのこもーッさるる島あつてを忍うき  
うらるるかへん後めたりあつたのゆへぬゆへにきうらる  
をおぢつらびく雨いそ降ぬぐーッ又ももめ江島を  
かいらを火のひうらう遊かふらるるびて蓬窓お雨のたもい  
に臥を

蚊のをらぬ國こもゆうてはなれ雨

おねさうもまた雨あきくに降来ておつうき物の白ひ

たちてこころ此こころ何にら似てらんあつちうふか、りたつ  
苔の中もさるる音ももわんをなうし唄を覗ふよく  
ゆをきりとかれしてあつたにをやりし事を物あひーッ、  
うらる成りあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
乃あつたあつた酒徒の誰彼臂をかけ青梅の一曲勝  
をうらるあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
山つたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

告あつたあつた乃八声やぎやうらる

空いッ、か晴は島と漕をなうらるに三里ばかり追つて  
風よめらるるあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
つぎうらる入江はた、泉のこも遠く嵐のたもをのみ  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
今らして水鳥のおちく巣くらるる餌をまきあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた



とらふて水と船子ともなにくがぬ

つらや我海月とつらなとる比を

入るべき津く一里どかりあひんとおちよ比をこに入  
もみたる風何らう浪に舟にひびき入りて苦の舟さ  
悔のとも帆は吹しがみてゆら花ありけど海の神ついで  
いふ物めて志たふふヤとをかづくべに頂たふまきもど  
も我もくとうらむと風吹かへもてゆきていざ  
かも波におとす人か何とまといし人をも入る泣かて  
志ふしなまふあふん風まこいどむとらんへか舟は半  
つづつなまふ大武とつ浦輪りいよよ里人あわら  
て舟と出漕まてつて物かをすくつてけりとある若  
かけよいままふりせと破た枝折る柱からゆつてつき  
船も十艘さうり吹かりたりけ船もいのちいひて  
とこの津よともうなるとつるきみまきう入し浪と波ま

大と存馬

ぬ水と物とはなるともに雨うらまがまく降きて水と  
海士の塩屋にたもと一舟船子共りおどて此雨いま  
とやうんまといかり信吉の舟も軟うらんふたのまも  
ふといあうていうまきるおとんかそらさ夢のほ  
あふんまふ止まぬも船をけり海のおとあう  
しく金の事一目の空に入てとらうおといおとら  
ありし猶波高うてうぬゆぐとありし所も破とおん  
昼退る比雨ぞ降りしまも少縁とる物ととあそ  
おまひ合まへおまひうと高止む

今もはこころうらまきわらうて風をこも吹きて空はくも  
あいて卯月除生のままた似たり五里まかり近て牛窓  
とと清ふつゝ夏はながなといみうて幸も少高き峯にと  
がし宮長も清うなる渚も解まる夕日こたかこくあ  
まの空いかりんと暮とやもこころいとちいさみて湯漬

かくくわくわくさるるやうに押やれを磯山はさうく茂てちい  
 さき鳥山は夏かきこにさうらう海はさうらうの中にもどむま  
 のきみぬのねふ夕華さるるつくと影爰もたうらふま  
 を緑いひろんとすと作らるる詩の意もおもしろい出ツ、サ  
 リの雑画にて遊ぶなり

夕日しほくく小雲とともりツ、みぎわの葦を屋りつくとさるる  
ていといともつさく暮かこ

入相の書し風やつきて星もさかりにさる果しんれだかのひ  
 そらさしし月艶に光り波のふくくまうさまふいまも  
 水鳥のちりま也

鳥のナと濡り遊らね水の月

病女の配所はさる大鳥さるのひけんさるるで壇は  
 津の浦もむさ群さる船をたはさるる島又浦もさるる

にらぶいこや寿永のむめとおもふやも

いまさるる夫にも捨たす羽取鳥

日比の津もも着くべきと沙のさるるあつんを名もなき  
 磯の若間さかにお志らうくきた沙待てたそか  
 ころ日比にうらたね消雨霽てさるる雲入ちま  
 津し磯の賤屋りこあれけけの嘆うりたれを

夕かちや沖を帆影の消る時

凡むらひ沙むらうて瀬溝とら山陰はあつおま爰と  
 ちりてのめく

日高しやと靴の浦に着くは津にいとら、不取けて市女

あまうとれいあまのさるるもヤ、り包むへきまわあま

高くくさるるいこわのよた牛頭天自れお旅ともあけ

神樂舞舞の乙せ業を引きおれ、さるる系竹あやつりれ遊ひ

もおのわ、打ち水さるるさるるがら都の祇林もも似かおら

いよつら まの地すま

祇園より神もお話や靴の浦

夜にむらあ頃、こころに添りて遊女のうしろ舟の中  
も岸の磯屋もひかりかきけてを青加茂川の遊ひとあま  
さくと都の諺聞の由ありれや去年のくまを御せし  
とたふおもひくしく句ぞ

登封潮梅

沖の雲を山さう峰のぼろさけり

目たけし靴の浦と出る子削の塩漬と退きくらく風  
と流し靴手打さうかろう行伊勢の島山左右にまぶ  
夕舟を笑やう海をひらき夢や七十三天幕をもくく  
此れは、*御手洗島*の船の歌をうた  
登封の島をうたむら行は靴手水の島にあり  
此れ雨の御手洗島に *御手洗島*の歌をうたむら

暮人とすの吹風しとすの風をわたりも漕ごうて

夜にとも明のくさくさ亭のちまも吹かろうて神さうら  
のく街の面もふすまをくしんやうなるの船子とま  
さくまうからうて風早くとあはるに寄るはさき  
がく人破をむらせむおやうゆるかきし波のこころもあや  
かき人眠つく木も我のこ猫臥さあありきとも火ち  
かあさうて燈も明石の巻をもも甲むむる犬の影の  
告るかとも遠くむむもくえれ光り山くも水て三也  
たへしたまふあひぬ

水三日月十二日

あさ風しとこころく伊勢の三ツの濱も着、後に来  
船観のあまし合草子とてはまきもけさるたい  
まらやうむらとさうら塩路りくもわすれぬ  
陸にもやまむらぬ葉あう友ちり

お山なる志し子のもへい今まきりつ新しと文して  
夕く水うたに立もせしう、又うらまのやうともぞん  
行滞志れぬ浪をさくれめわられすや成り入るまき道  
しなぐらう山しれもと打むすれまきと滞来れ船乃聲  
に浦のちれも遠く東にけりれふまれと遠く来た  
けり江の水三千北里と傳と柳やれやれの人もらん  
おもいぬるまきれのまき

水遠く山りきりて夕うらま

かきあれり志山むらへれる水き月中のまきり  
都れ瓜名月と我徒見つ、おぶれり也れ愛におれい出

是しとらあれり瓜の假り枕

志山われりもてゆまきれ巻とんほれは向を右と入て瓜  
りれとらとらんれ集もれまぬ京の寛法得て板とす  
是れ宇和島と二道三十里のち隔れりれまきれあれる

瓜いさ

すは怒りのあれりれ島れもあれられきれいて見よと云  
舟よれ行社半れやれ人れを伴れうれし  
又れお島のあれりちのまきれ吉田とら所あれりれ狸見  
三者ありれ半時れ庵れにれて我れ境にもあれぬれ雅志  
人ふれこれぬれたれりれて日と経れて有れし

舟作れるホれを疾れまれありれ蟬乃聲

秋のまれの五れ月れいれふれりれ美れ別れのれ人れもれおれかりれておれれが  
もちれいれけるれ船れよれのれせれてハれ暢れ涼れいれふれ道れをれわれりれて送れる  
昼れあれつれまれのれまれかれられるれとれおれれれにも  
小れされきれふれゆれびれとれ帆れされ揚れたれぬれだれよれすれまれてヤれ、れや  
ゆれられりれよれ沖れのれまれとれいれだれがれ室れもれ水れのれまれとれ波れう  
音れりれとれ涼れまれしたれ秋れ水れ長れ天れのれ望れをれ書れしてあれまれしたれ雲  
のれまれがれいれれれがれ叙れかれふれまれりれとれたれちれヤれつれくれ入れまれるれとれ近れ  
と云





志山建置しつる翁の碑とありてもあがていふはるきた  
岩屋寺といふ遍路第一の霊所也といふ人もある  
はるに行

爰に、葉月正とあるく一僧房は、岩の中に入居りて  
土をくみぬふるれと

山在し割つて供す岩屋の  
今底の杉も千尋や秋の風

葉月のしるしは形親にかつて舟とらうか

相せらふ島の鳥を毒問のさかんに船をこし  
しるきの灘を追ひつるも舟をこし鳥を捕着

けみよとは安齋のうらむらひ給ふはた賑はる舟は  
人多かるよと所也行子といふ人もこちありて日よこ

の舟は数にあらざりて舟をこし舟をこし舟をこし  
所の及ぶる日也いひの舟をこし舟をこし舟をこし

着つて渡りいと珍なりと也

十四日

けりもあつしとてあまも入れて船をこし舟をこし

舟をこし舟をこし舟をこし舟をこし舟をこし舟をこし  
遊せともは山やうよ行りて舟にもうらつて

待るりの先にもあり宵の月

名月や鳥にも寝る波枕

けねりて涼しきとて風にたがうて遠くへ行く船も  
あさいまきつて爰とてりて我々の雲舟行船に俵して十六

日の舟舟をこし舟をこし舟をこし舟をこし舟をこし  
とらうしものた成りてと海ももぬげ入もてげのさかち

取捨もくしとてころふむらよ雷をこし舟をこし舟をこし  
の先がと云あつとて過おけあつとてニツの浪もし見へて

け比合き舟の真下にあつてやがてはよの灘や行くんやと

いりくちが其國の人ふなるめうれてこひか  
猶見<sup>ん</sup>岸にもりふとあるく一船<sup>せふ</sup>もおもふとふふ  
甲斐<sup>あゐ</sup>なるとかの船<sup>ふね</sup>君のつくるとくもえて一なる遠さ  
か行<sup>い</sup>實<sup>じつ</sup>舟<sup>ふね</sup>は鳥<sup>とり</sup>た似<sup>に</sup>てお<sup>お</sup>く<sup>く</sup>る物<sup>もの</sup>なり  
道<sup>みち</sup>三十<sup>さんじゅう</sup>里<sup>り</sup>もかりお<sup>お</sup>つて上<sup>うへ</sup>の関<sup>せき</sup>も着<sup>き</sup>く日<sup>ひ</sup>暮<sup>くれ</sup>て月<sup>つき</sup>出<sup>で</sup>ぬ  
船<sup>ふね</sup>は猶<sup>なほ</sup>走<sup>はし</sup>る魚<sup>いさな</sup>一

十<sup>じゅう</sup>つ<sup>つ</sup>お<sup>お</sup>や<sup>や</sup>帆<sup>ふね</sup>は八<sup>はち</sup>分<sup>ぶん</sup>も小<sup>せう</sup>お<sup>お</sup>丸<sup>まる</sup>

今宵<sup>こんや</sup>あ<sup>あ</sup>のけ<sup>け</sup>一<sup>いち</sup>き<sup>き</sup>湊<sup>みなと</sup>のま<sup>ま</sup>は<sup>は</sup>繪<sup>え</sup>は猶<sup>なほ</sup>止<sup>とど</sup>ま<sup>ま</sup>へ<sup>へ</sup>や宵<sup>よ</sup>過<sup>と</sup>こ  
り<sup>り</sup>も追<sup>お</sup>風<sup>かぜ</sup>よ<sup>よ</sup>くま<sup>ま</sup>さ<sup>さ</sup>う<sup>う</sup>て十<sup>じゅう</sup>七<sup>しち</sup>の<sup>の</sup>ほ<sup>ほ</sup>ろ<sup>ろ</sup>き<sup>き</sup>舟<sup>ふね</sup>同<sup>どう</sup>につ<sup>つ</sup>く  
阿<sup>あ</sup>比<sup>ひ</sup>陀<sup>た</sup>寺<sup>じ</sup>に<sup>に</sup>も<sup>も</sup>ま<sup>ま</sup>は<sup>は</sup>院<sup>いん</sup>と<sup>と</sup>書<sup>か</sup>す<sup>す</sup>の<sup>の</sup>む<sup>む</sup>ろ<sup>ろ</sup>一<sup>いち</sup>平<sup>へい</sup>家<sup>け</sup>の<sup>の</sup>一<sup>いち</sup>門<sup>もん</sup>と  
は<sup>は</sup>あ<sup>あ</sup>む<sup>む</sup>く<sup>く</sup>お<sup>お</sup>ま<sup>ま</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>や<sup>や</sup>安<sup>あん</sup>徳<sup>とく</sup>帝<sup>てい</sup>ろ<sup>ろ</sup>み<sup>み</sup>り<sup>り</sup>け<sup>け</sup>た<sup>た</sup>ら<sup>ら</sup>に<sup>に</sup>ま<sup>ま</sup>な  
の<sup>の</sup>古<sup>こ</sup>々<sup>々</sup>一<sup>いち</sup>ま<sup>ま</sup>し<sup>し</sup>ん<sup>ん</sup>へ<sup>へ</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>ん<sup>ん</sup>け<sup>け</sup>ふ<sup>ふ</sup>ま<sup>ま</sup>た<sup>た</sup>ま<sup>ま</sup>は<sup>は</sup>盛<sup>せい</sup>知<sup>ち</sup>  
盛<sup>せい</sup>と<sup>と</sup>一<sup>いち</sup>の<sup>の</sup>侍<sup>しやく</sup>部<sup>ぶ</sup>御<sup>ご</sup>の<sup>の</sup>局<sup>きよく</sup>卒<sup>そつ</sup>の<sup>の</sup>内<sup>うち</sup>侍<sup>しやく</sup>は<sup>は</sup>な<sup>な</sup>の<sup>の</sup>中<sup>ちゆう</sup>へ<sup>へ</sup>も<sup>も</sup>奉<sup>ほう</sup>  
て<sup>て</sup>め<sup>め</sup>くり<sup>り</sup>の<sup>の</sup>禪<sup>ぜん</sup>の<sup>の</sup>筆<sup>ひつ</sup>を<sup>を</sup>も<sup>も</sup>く<sup>く</sup>む<sup>む</sup>こ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>い<sup>い</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>の</sup>か<sup>か</sup>ね<sup>ね</sup>と<sup>と</sup>取<sup>と</sup>り<sup>り</sup>て

天皇<sup>てんわう</sup>誕生<sup>たうじん</sup>も一<sup>いち</sup>と<sup>と</sup>せ<sup>せ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>愛<sup>あい</sup>の<sup>の</sup>浦<sup>うら</sup>わ<sup>わ</sup>に<sup>に</sup>入<sup>い</sup>水<sup>みづ</sup>の<sup>の</sup>舟<sup>ふね</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>  
あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>に<sup>に</sup>書<sup>か</sup>る<sup>る</sup>一<sup>いち</sup>と<sup>と</sup>せ<sup>せ</sup>

月<sup>つき</sup>澄<sup>せい</sup>や<sup>や</sup>底<sup>ぞこ</sup>も<sup>も</sup>ま<sup>ま</sup>さ<sup>さ</sup>き<sup>き</sup>都<sup>みやこ</sup>鳥<sup>とり</sup>

薄<sup>うす</sup>墨<sup>すみ</sup>の<sup>の</sup>帆<sup>ふね</sup>

お<sup>お</sup>く<sup>く</sup>ま<sup>ま</sup>て<sup>て</sup>船<sup>ふね</sup>も<sup>も</sup>里<sup>さと</sup>や<sup>や</sup>一<sup>いち</sup>の<sup>の</sup>歌<sup>うた</sup>

柳<sup>やなぎ</sup>の<sup>の</sup>浦<sup>うら</sup>も<sup>も</sup>わ<sup>わ</sup>く<sup>く</sup>て<sup>て</sup>や<sup>や</sup>倉<sup>くら</sup>に<sup>に</sup>や<sup>や</sup>る<sup>る</sup>例<sup>れい</sup>も<sup>も</sup>風<sup>かぜ</sup>お<sup>お</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>一<sup>いち</sup>次<sup>じ</sup>  
て<sup>て</sup>旅<sup>りょ</sup>歴<sup>れき</sup>の<sup>の</sup>枕<sup>まくら</sup>や<sup>や</sup>す<sup>す</sup>か<sup>か</sup>し<sup>し</sup>も

船<sup>ふね</sup>の<sup>の</sup>夢<sup>ゆめ</sup>見<sup>み</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>教<sup>しやく</sup>へ<sup>へ</sup>く<sup>く</sup>野<sup>の</sup>分<sup>ぶん</sup>哉<sup>やい</sup>

野<sup>の</sup>分<sup>ぶん</sup>は<sup>は</sup>ま<sup>ま</sup>け<sup>け</sup>一<sup>いち</sup>く<sup>く</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>わ<sup>わ</sup>こ<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>一<sup>いち</sup>く<sup>く</sup>て<sup>て</sup>黒<sup>くろ</sup>崎<sup>さき</sup>に<sup>に</sup>や<sup>や</sup>る<sup>る</sup>  
ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>う<sup>う</sup>ま<sup>ま</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>て<sup>て</sup>空<sup>そら</sup>は<sup>は</sup>矢<sup>や</sup>ふ<sup>ふ</sup>の<sup>の</sup>う<sup>う</sup>に<sup>に</sup>晴<sup>は</sup>る<sup>る</sup>遠<sup>とほ</sup>く<sup>く</sup>海<sup>うみ</sup>を<sup>を</sup>り<sup>り</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>  
見<sup>み</sup>な<sup>な</sup>さ<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>れ<sup>れ</sup>孤<sup>こ</sup>帆<sup>ふ</sup>乃<sup>の</sup>天<sup>てん</sup>邊<sup>へん</sup>より<sup>より</sup>ま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>の<sup>の</sup>外<sup>ほか</sup>の<sup>の</sup>見<sup>み</sup>と  
一<sup>いち</sup>く<sup>く</sup>海<sup>うみ</sup>は<sup>は</sup>ま<sup>ま</sup>さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>に<sup>に</sup>や<sup>や</sup>る<sup>る</sup>

く<sup>く</sup>ら<sup>ら</sup>も<sup>も</sup>帆<sup>ふね</sup>も<sup>も</sup>風<sup>かぜ</sup>と<sup>と</sup>中<sup>ちゆう</sup>り<sup>り</sup>秋<sup>あき</sup>の<sup>の</sup>空<sup>そら</sup>

箱<sup>はこ</sup>崎<sup>さき</sup>の<sup>の</sup>八<sup>はち</sup>幡<sup>ばん</sup>に<sup>に</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>

箱崎や紐々草乃花も  
廿四日太宰府の唐祭にこそ  
御手洗へ来て研書やわらう鳥

箱崎の唐祭にこそ  
御手洗へ来て研書やわらう鳥

紀行花のり

神代斐子海睡  
備江孫天の道  
其凡ちつ詠南類

長崎の斐子海睡を  
ひきまいたのり  
の書も人能斐子海睡の二子筆に功  
菊月八日登山妻がらん

ひきまいたのり  
の書も人能斐子海睡の二子筆に功

春興

まはらま中  
に勸はつて

まはらま中  
に勸はつて  
波の行来山

宝暦元年  
三十三年

平一し出いしきく唐船も如きわくり南朝の寺霞  
よりもはて友に梅花落と吹ものあはたき先  
秋帝國の別水にあらん三三の月をみまひ出い人もか  
友とちのうらなきたにやあらんまてに橋辺の柳と折畫し  
て伴お人をも遠く成ぬ里楓子獨峰に待得し志  
らくかいらふりたにこれさく分おけ月と我旅病の親  
胖齋の阿老一老の身は待得春に別水乃あはれと  
かけて人の行えん

と大和歌とくい花かこの香くわらせ首途とさき  
り給をけしが春のひと白たむあけはくけしちあつ  
がき山路小くれてひとまの花の陰もをさる

山鳥ももの新うけし地枕の枕も名残はたまに雨打  
拂ひし道は十里たの踏てそのまの浦わたがらふ

たちちの月朧にのびて波の行末も遠かぬさし  
友とちて七里乃河をさふゆわかくしてさもおもひに  
たまねを

江とあはる芦ちあはるも芽くむ頃

唐津の杉原と出て濱崎とわたり所わゆる今宵壁とへ  
たてし陣とまきと新枕のソヒとして酒のこころふ  
濱松乃わたりかきり所かひとりつらりし  
甘日おろく

磯山つひの道罷こあつ唐津の城を海にせき波た  
かも岳陽城と誦あるに三韓は西北にあつて響の灘  
天をのみかきとすひ水うら山は原にまてたやす人  
のみがらぶともえん石がんはばをこころいん  
かめ春魂ハ化してソつち行かんとおもふにも

石を飛こころわいまたもつらつら

生りか原を道て

畑打にまゑな連あり生キのね

道一里をかり行て

かやろふとも目も消さるる生り松

遠きなるものもさるるさうなる一むも雨乃色なり海士の塩

水に膝をくめ枕中かきさるる成りぬ

くやも情も頼は情のあがり近き何かのももやわらふ是も

大宰府の信神ももふまゝ人にうせて進解のめす奉

其の *Wakobun* *Wakobun* *Wakobun* *Wakobun* *Wakobun*

拍子もさるるつら鳥か梅こや *Wakobun* *Wakobun*

中あがり利休屋のまの巻か中の松さるる *Wakobun* *Wakobun*

ね *Wakobun* *Wakobun* *Wakobun* *Wakobun* *Wakobun* *Wakobun*

橋 *Wakobun* *Wakobun* *Wakobun* *Wakobun* *Wakobun* *Wakobun*

情もさるる *Wakobun* *Wakobun* *Wakobun* *Wakobun* *Wakobun* *Wakobun*

しよも神皇功后いと平らにお崎の古神もん産きたま  
くくきこし

鳥の巣も椎やたのふて神乃延

鳥も續く海の中道ともあるねる青いあら

踏分敷しうやたつねて春の鹿

サシの雨

むちうらふ鳥も、まゝ火倉にやゝるお更と星見ゆ

吊柳浦文

西に果ありまき、波とさうめて、船と柳と浦にむらふ舟の

長三丁に告てりへらく比り又治元のとらむと一澄み此浦

に戦つて多ふらくの人とむまきさるるいかつて海に沈てあ

るは恨んで波またいふふそのまきさるるむむいし果のや

雨夜の火影いさうにあらん夕のけう塩屋にあらでか

おけりきたもどかしくおれも舟にぞうてあやしみま  
かくて河津陀寺の鐘あつたまを運つて空の雲何れも  
まじりけりいまやかくうらるる春の風た枯一葉長くかつ  
て浦の柳もみどりかく鳥を飛てくくもを鳥屋の杉を  
うらうらに残の月割しの霜凜とて秋の日のこ  
いてや平氏ハ島を渡つたる壇の浦輪かかり是れ  
濱もまたげかくのま雨のほけりかくれまてたふま  
みこころもまをまぬ

源の範頼三浦の助けりものま筆内とてまつて兵の先に  
すくぬ義経以下が執り七百余艘白き八重旗波もあ  
こつて吹ちる平は櫻のいろ太刀のこかけ甲の星岸の  
山吹もりろやまをらん源平相去ると三十余丁叫んでつた  
めめどくに射る平の秀遠相備黨盛次忠光景清景経  
宗村とともめて五百余艘菊池原田三百余艘唐船と作

つてはうま

平の知盛も豊前よりあつて千騎を以て源氏とつかけあ  
は浦の軍あやうきを知り三十余艘と後に追は照る日  
に紅の色をもつて綾の吹りぎ錦の母衣をかんで霞の中  
にたふす

兩軍已に叙せりつてたういふちかふべを切て露をくく  
や我をて奴とせんたかかんや骨を砂にさらせん谷声  
がううて山笑はる日ハくくんで春をうらうら時に宗經  
義盛の舟よりつれと義経かろく飛んでまこちをせんせ放  
徑急に戦つて沈も民部の太夫忠とかへも志のゆかりん  
仇の風波を巻いて楯をかやう柱を折る天源氏に借りに  
神を以てすまや晴延魚の過をもとに及んで一門たもと  
わくして泣新中納言いこく打つて流る血を押しに手  
無うもちるま鑑をあけお着ち絶一子弦も袖を後びま

ていぢもんをかへりしをヤ、いとゞ唯平家を滅するものは  
平家なりと旬て睥とかへりて宇盛をにらむ髪をかめぢて  
甲をこのかせで宇盛夫箭をなげる雀のこゝろにふゝぬ又  
かへりみてほくあひごい何ぞ脚指をあぐゝあぐる東お  
とこの品や定りんくと盃を上げてよ、と呑船を洗ひ寢を  
やくた至りて高直直次いせんで沈む知盛錠りをさへて沈  
めをたす長子を張ッて敵キとをらむいからうのうわざること待  
て同じく沈む二位の花君天宣の巾衣をかへけ高き船先に  
まを見えておのく紅のたかまを志めておくるべういとま  
むより似たれと先人ちりちの辰を流らむ誰かまうんと  
て声を放ッ。

君ちいさき巾たなごころをうくり齋宮の遣はまおま國を  
りづらふやみ御衣川の流れきよて波の底清にぞも  
かたのちりちの辰を流らむ誰かまうんと

安ん

保元の昔たに鯨人の疾にしらんとな

女院ももりの大納言の局宇盛時忠海氏に捕し消入さう疾  
のいのちやうらむ高きまばも籠指物をよせかへる波に縁  
物して磯のわもろ高き蹴り眠らんとするも一町をわき  
岸のからすむらり飛んでまたたまん物を告るけ日己に  
西海にほらしてより魂魄むすんで天深く鬼神集りて雲  
早し白鷺時をたうへぞつむさそと語しいのれのかんぞせ  
驚く成んぬ我少妻を守んにあつと是や蛟就のこゝろ  
にて守るこゝろ過おにゆき

廿四

船をあかぬを長門の國へ行くくろし丸國の室を霞  
くやくまかき一是より都も山つつきまもよにす重ふつ  
トせし出て友をうりき磯つゝいの道と二里はありぬ

廿五





廿七日夕又つ八郡八郡にやると

廿八日晴く山もやると  
廿九日かゝ山くけお寺と見れ大櫻のそりて咲出ると  
若き沙路のわさるやあつん折とらば五百生罪人  
書してまると

初め風秋のこもくに吹てき  
船長ががたたふてやまらふ  
船入していふと過る海生り宿

是よりいよの國へ便もとらり志山倉第ののり文す  
わらふと波風にちらふもそこも立て二里をわたり行  
日にお入がたふと波ももどり浪もあつておちる人の  
まわりのまもつて遠くを渡るもつた日暮のぬる

廿九日宿すこけりこもくにちらふと落して遠くよりの  
舞ももつらふとかこやうよとさむらひなる宮のけりいふ  
海の中にまびへしてちらふと藏所まほのうに見ゆ

漁火のそらる露乃りソク

初りこにち挿んと云ん三里もかりけ山を越へたりと  
内いとつらふれといつて石上の夢やむをりんと道半あま  
行の宮は星とすくもつらふのうに雨催りいれと鬼いよ  
くちの山路むらぶきたいといつてか入らんもつらふと危き道  
かへて登見過る里にや出んとわさるは山よりの  
見まかり見置つて可逢野とらソクを驛驛にあぶむ  
あつてかへり着けら日暮ふたつ何人かは里よりの  
とらふもつらふとさむらひなる宮のけりいふと樹下  
雨にちかきも果ぬる所の長よきりて事と告ふよけぬ  
てゆふのそらる露乃りソク

二日... 舟... 横... 渡... 實... 風流...

旅人... 道... 拾... 沙...

瀬の... ち...

... 桃の... 後

... け...

... 五...

... 雨... 風...

... 社...

... 川...

かに起...

吹...

七...

け...

の...

つ...

上...

ら...

こ...

妻...

未...

何...

か...

水...

かの谷風の響うつらうつら山路のしんと志し一人のむし  
かきもちまひあき

花とてぬ衆生やあつて芥の音  
下つて坂もりの里まやると飯とももつる音一同に入  
たつてかた世間の音よまきぎれ

曾根の松

永く目と枝もらんごとく松のうけ

石の宝殿

あつてまろく石を宝殿やむのこゝ

言砂の松

芽はさかく色もつらへ松路のわが

阿うー

海の底にまきれ入わらうらひのわものむかひは  
もの人からもんごとくかきぬわ

身にほごふ草も咲やと老乃松

須

惟光良清つらへまうせし由宿屋のまもも爰らやうん  
とおもふまごよまうたごにまかりくまもあはれど

揃交せしといぬ草にぞ笑ひ声

敷盛塚

膝のトにゐても惜むすもれ哉

逆落

帆の外に凡やさくらの逆落

楠墳

たんはくも草の菊水く岸小笑

巖梅

ちりちりの梅や柳の太くうわ

ミヤこのちりきりしさにぞ歌とあまうにそまかりし





くまー無<sup>無</sup>岸<sup>岸</sup>せち<sup>切</sup>にこころを今せて再金<sup>金</sup>花<sup>花</sup>山のつもとに  
やううと足む我をさか<sup>か</sup>か<sup>か</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>してあせし

杖と筆添<sup>添</sup>了<sup>了</sup>捨<sup>捨</sup>ん花<sup>花</sup>の雨

あまもる<sup>送</sup>て夏<sup>夏</sup>のそ<sup>そ</sup>め<sup>め</sup>に<sup>に</sup>れ<sup>れ</sup>くら<sup>ら</sup>き<sup>き</sup>身<sup>身</sup>の上<sup>上</sup>に<sup>に</sup>りしと  
そ<sup>送</sup>軒<sup>軒</sup>なるものあ<sup>あ</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>瘡<sup>瘡</sup>む<sup>む</sup>のち<sup>ち</sup>と<sup>と</sup>し<sup>し</sup>き<sup>き</sup>こ<sup>こ</sup>し<sup>し</sup>と  
い<sup>い</sup>や

中津庄奥平宮殿  
イイ百廿

た<sup>送</sup>たわ<sup>送</sup>り<sup>り</sup>て公<sup>公</sup>のか<sup>か</sup>た<sup>た</sup>に<sup>に</sup>め<sup>め</sup>さ<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>人<sup>人</sup>さ<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>け<sup>け</sup>い<sup>い</sup>て<sup>て</sup>き<sup>き</sup>め<sup>め</sup>物<sup>物</sup>も  
と<sup>送</sup>う<sup>送</sup>野<sup>野</sup>人<sup>人</sup>さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>た<sup>た</sup>か<sup>か</sup>こ<sup>こ</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>き<sup>き</sup>こ<sup>こ</sup>わ<sup>わ</sup>こ<sup>こ</sup>は<sup>は</sup>唯<sup>唯</sup>水<sup>水</sup>草<sup>草</sup>の  
か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>い<sup>い</sup>な<sup>な</sup>と<sup>と</sup>母<sup>母</sup>さん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>せ<sup>せ</sup>の<sup>の</sup>果<sup>果</sup>り<sup>り</sup>秋<sup>秋</sup>興<sup>興</sup>の<sup>の</sup>賦<sup>賦</sup>さん<sup>ん</sup>つ  
く<sup>く</sup>人<sup>人</sup>き<sup>き</sup>も<sup>も</sup>先<sup>先</sup>う<sup>う</sup>け<sup>け</sup>か<sup>か</sup>こ<sup>こ</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>た<sup>た</sup>お<sup>お</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>其<sup>其</sup>多<sup>多</sup>す<sup>す</sup>定<sup>定</sup>り<sup>り</sup>ぬ  
と<sup>と</sup>か<sup>か</sup>か<sup>か</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>あ<sup>あ</sup>路<sup>路</sup>う<sup>う</sup>七<sup>七</sup>年<sup>年</sup>の<sup>の</sup>き<sup>き</sup>き<sup>き</sup>た<sup>た</sup>地<sup>地</sup>接<sup>接</sup>穂<sup>穂</sup>の<sup>の</sup>梅<sup>梅</sup>の<sup>の</sup>集<sup>集</sup>あ<sup>あ</sup>み  
て<sup>て</sup>杖<sup>杖</sup>す

大<sup>大</sup>人<sup>人</sup>扶<sup>扶</sup>持<sup>持</sup>取<sup>取</sup>て<sup>て</sup>た<sup>た</sup>ま<sup>ま</sup>  
柳<sup>柳</sup>枝<sup>枝</sup> 節<sup>節</sup>收<sup>收</sup>

水<sup>水</sup>を<sup>を</sup>日<sup>日</sup>と<sup>と</sup>日<sup>日</sup>う<sup>う</sup>け<sup>け</sup>か<sup>か</sup>こ<sup>こ</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>た<sup>た</sup>お<sup>お</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>其<sup>其</sup>多<sup>多</sup>す<sup>す</sup>定<sup>定</sup>り<sup>り</sup>ぬ  
か<sup>か</sup>の<sup>の</sup>野<sup>野</sup>坡<sup>坡</sup>  
か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>い<sup>い</sup>な<sup>な</sup>と<sup>と</sup>母<sup>母</sup>さん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>せ<sup>せ</sup>の<sup>の</sup>果<sup>果</sup>り<sup>り</sup>秋<sup>秋</sup>興<sup>興</sup>の<sup>の</sup>賦<sup>賦</sup>さん<sup>ん</sup>つ  
く<sup>く</sup>人<sup>人</sup>き<sup>き</sup>も<sup>も</sup>先<sup>先</sup>う<sup>う</sup>け<sup>け</sup>か<sup>か</sup>こ<sup>こ</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>た<sup>た</sup>お<sup>お</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>其<sup>其</sup>多<sup>多</sup>す<sup>す</sup>定<sup>定</sup>り<sup>り</sup>ぬ  
と<sup>と</sup>か<sup>か</sup>か<sup>か</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>あ<sup>あ</sup>路<sup>路</sup>う<sup>う</sup>七<sup>七</sup>年<sup>年</sup>の<sup>の</sup>き<sup>き</sup>き<sup>き</sup>た<sup>た</sup>地<sup>地</sup>接<sup>接</sup>穂<sup>穂</sup>の<sup>の</sup>梅<sup>梅</sup>の<sup>の</sup>集<sup>集</sup>あ<sup>あ</sup>み  
て<sup>て</sup>杖<sup>杖</sup>す

宝<sup>宝</sup>暦<sup>暦</sup>四年<sup>年</sup>甲<sup>甲</sup>戌<sup>戌</sup>

宝<sup>宝</sup>暦<sup>暦</sup>四年<sup>年</sup>甲<sup>甲</sup>戌<sup>戌</sup>  
續<sup>續</sup>陸<sup>陸</sup>行<sup>行</sup>の<sup>の</sup>全<sup>全</sup>を<sup>を</sup>し  
去<sup>去</sup>り<sup>り</sup>

其<sup>其</sup>の<sup>の</sup>風<sup>風</sup>流<sup>流</sup>志<sup>志</sup>び<sup>び</sup>して<sup>して</sup>後<sup>後</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>じ

と<sup>と</sup>一<sup>一</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>余<sup>余</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>も<sup>も</sup>西<sup>西</sup>北<sup>北</sup>の<sup>の</sup>松<sup>松</sup>操<sup>操</sup>す<sup>す</sup>く<sup>く</sup>ま<sup>ま</sup>つ<sup>つ</sup>の<sup>の</sup>  
い<sup>い</sup>て<sup>て</sup>き<sup>き</sup>め<sup>め</sup>五<sup>五</sup>月<sup>月</sup>の<sup>の</sup>末<sup>末</sup>又<sup>又</sup>二<sup>二</sup>門<sup>門</sup>に<sup>に</sup>冠<sup>冠</sup>と<sup>と</sup>御<sup>御</sup>を<sup>を</sup>凡<sup>凡</sup>外<sup>外</sup>一<sup>一</sup>葉<sup>葉</sup>其<sup>其</sup>行<sup>行</sup>  
衛<sup>衛</sup>な<sup>な</sup>が<sup>が</sup>う<sup>う</sup>五<sup>五</sup>噫<sup>噫</sup>の<sup>の</sup>歌<sup>歌</sup>を<sup>を</sup>え<sup>え</sup>う<sup>う</sup>こ<sup>こ</sup>ふ<sup>ふ</sup>ま<sup>ま</sup>身<sup>身</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>じ

皇<sup>皇</sup>月<sup>月</sup>末<sup>末</sup>の<sup>の</sup>四<sup>四</sup>日<sup>日</sup>武<sup>武</sup>城<sup>城</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>じ

い<sup>い</sup>か<sup>か</sup>め<sup>め</sup>く<sup>く</sup>松<sup>松</sup>を<sup>を</sup>さ<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>行<sup>行</sup>誠<sup>誠</sup>や<sup>や</sup>こ<sup>こ</sup>し<sup>し</sup>水<sup>水</sup>を<sup>を</sup>友<sup>友</sup>を<sup>を</sup>水<sup>水</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>に<sup>に</sup>  
久<sup>久</sup>し<sup>し</sup>く<sup>く</sup>猶<sup>猶</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>け<sup>け</sup>き<sup>き</sup>道<sup>道</sup>を<sup>を</sup>横<sup>横</sup>さ<sup>さ</sup>や<sup>や</sup>に<sup>に</sup>馬<sup>馬</sup>の<sup>の</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>む<sup>む</sup>け<sup>け</sup>て  
殊<sup>殊</sup>父<sup>父</sup>の<sup>の</sup>部<sup>部</sup>守<sup>守</sup>を<sup>を</sup>た<sup>た</sup>に<sup>に</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>じ<sup>じ</sup>雨<sup>雨</sup>を<sup>を</sup>く<sup>く</sup>神<sup>神</sup>を<sup>を</sup>水<sup>水</sup>に<sup>に</sup>山<sup>山</sup>風<sup>風</sup>を<sup>を</sup>木<sup>木</sup>  
も<sup>も</sup>折<sup>折</sup>り<sup>り</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>く<sup>く</sup>道<sup>道</sup>を<sup>を</sup>お<sup>お</sup>く<sup>く</sup>水<sup>水</sup>を<sup>を</sup>く<sup>く</sup>水<sup>水</sup>を<sup>を</sup>く<sup>く</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>じ<sup>じ</sup> 叶<sup>叶</sup>羽<sup>羽</sup>た<sup>た</sup>い<sup>い</sup>夢<sup>夢</sup>と

嶺<sup>嶺</sup>岸<sup>岸</sup>春<sup>春</sup>を<sup>を</sup>ま<sup>ま</sup>つ<sup>つ</sup>す  
神<sup>神</sup>雨<sup>雨</sup>改<sup>改</sup>双<sup>双</sup>羽<sup>羽</sup>久<sup>久</sup>江<sup>江</sup>

の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>き<sup>き</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>社<sup>社</sup>中<sup>中</sup>誰<sup>誰</sup>彼<sup>彼</sup>き<sup>き</sup>こ<sup>こ</sup>ら<sup>ら</sup>  
い<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>と<sup>と</sup>世<sup>世</sup>の<sup>の</sup>春<sup>春</sup>を<sup>を</sup>く<sup>く</sup>え<sup>え</sup>ん<sup>ん</sup>け<sup>け</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>じ<sup>じ</sup> 鶉<sup>鶉</sup>籠<sup>籠</sup>棒<sup>棒</sup>と<sup>と</sup>作<sup>作</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>に<sup>に</sup>  
半<sup>半</sup>が<sup>が</sup>り<sup>り</sup>した<sup>た</sup>秘<sup>秘</sup>未<sup>未</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>に<sup>に</sup>

棟<sup>棟</sup>揚<sup>揚</sup>の<sup>の</sup>頭<sup>頭</sup>う<sup>う</sup>か<sup>か</sup>い<sup>い</sup>く<sup>く</sup>山<sup>山</sup>操<sup>操</sup>

と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>じ<sup>じ</sup>を<sup>を</sup>忘<sup>忘</sup>れ<sup>れ</sup>さ<sup>さ</sup>う<sup>う</sup>し<sup>し</sup> 叶<sup>叶</sup>羽<sup>羽</sup>覚<sup>覚</sup>え<sup>え</sup>て<sup>て</sup>語<sup>語</sup>お<sup>お</sup>か<sup>か</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>し<sup>し</sup>り<sup>り</sup>

おきめいれ

欄干に立ちしも高し雲の山峯

あまの山の宮にすまはるる鳥川お越へて八重

立山のそとよりとほまはるるまはるる

しーつおや切止の木の葉の山から

前

けしうから曲けて浅間乃風涼し

城に凡涼し知の花今もつがさかちふ草みうらう青み

て麦も漸あからしむ

塩尻峠に腰打つけて

富士の青しうらふも無防と清水丸

積穂の原

ひかり三軍はあま破止と唯一将の名やわたりははたき

草上の草も成文一假名の陣もあまの山は

おきめいれ

負て散る旗色もあり雪乃と称

向はこられ物よふれておこるもさうと春の花咲雪残して

たぎし柳の青かきんよりの梅もあはれと秋の猶

りあはくもあらん見らるるもさき夏れし山のおびし谷川

の岨をつらうかきり山路もさうらうとさきく

行きたりあつとも美濃さく山路かちにおかへて近江

もさき

か茂川納涼

大踏先きうらうと伴ぬ

おの類雪とみあはれと涼く都

水柄も風も晒しと涼く都

しうらふもさきとあはれん

のそ月かきり二子屋へて都と出た涼のわらうと

淀河をへらすと涼し舟車



百川堂三六五段  
五十六

いさく四とせもさるもまぬ九國の旅寐思を立て浪花の浦  
よりおちつるもきき舟にうらむ好隊の國志山々亭に遊  
びも今宵をりしるも水さうつものさしけむ都にあ  
て故人八俣親小集り飯の能浦の司新も生きてはありし  
ちしむとくが多くの人も失せぬ月とたにからてくまなきん  
旅て見ゆ命も夢や瓜名月

お宿を舟出して川口かゝる河ももおとひおのし  
ものころも木もちりありし波おきて横さきも吹けり船  
うらもよき剣て汗のうらく追ふ程も室も着ね半の月も  
おぬくき頃も

名たのむ室君は舟にうつりてうらみかありて明ぬ  
楫に集て枕の長夏を月

音頭の瀬戸

海舟浦舟の波もたてぬ波もたてぬ波もたてぬ波もたてぬ

にらにていなる波もたてぬ波もたてぬ波もたてぬ波もたてぬ  
しるもたてぬ波もたてぬ波もたてぬ波もたてぬ波もたてぬ  
森の桐輪のちか

輝つれてかゝつてく山や木ひら

ソククーマ

おとりの浦より舟りしてあゝらんとせ一時風むらあてむ  
く徳に思けんおとりのくに生れのやあやうし  
と水霞と追尋りて又ソククーマの思ひの  
もくふまにまきりてまぢかぬらつて  
たまたま中して流るる水も  
旅より行身がれを只生きてかへらんためれからん

追風そののまを渡ソククーマ

彌山ののほ

月もいまや西紅ひり夏木立



て白鳥さん添て野暮

清人多くやききうてあはれみせうふれあことやまは  
花の時おもむるふれてそのまは遊ふわらわき  
こももん唐土人おを文りこおがしき興あつて

醉ふ酒の友

りく久くおもひ立ちし御酒明題の集わし寝のい  
まに揺るふきこころよせまふけつひひる風合  
く白も入るや又こもんど同志おあをいむか  
はらうもむにも似てつあくきめくわさるる  
やこて中しれと物たらのねえ板せん

は津少風人おこころ卯七は一むりれ故人と孫も  
たへるもや又去来野散入りまは地やて其流者  
あはれおもひむとことたすおかむんはる三千風も  
祖とて其家とらんする人あはれ是もはるる

まの南の山々山伏塚と云ありてつとむくも  
はあひよれあま見こし火のまもあまもやぶつねの  
とるれむ人もおそいぞ我もあまの度見こるこころえ  
人よ問をうりした其人のいへつは紙葉に火のもぬらりし  
うらむは故に九國をてはの國をうりてあつて人の  
號するもまはれはらぬひの火と云もそこまにかきらむ  
はらうもあつて

己に三とせりけり共春うんくくとも道の興いとたか  
うりしうは能仙窟南仙録の二集を作お集を成りて武の  
文昌閣板とん

紀行小冊録

中序

かゝる時を武の冠子いまま行門に住所ともあてせ  
のふしふふいにてあつと久くやとりとするに雅志めせ  
ちやるそのたのしむか<sup>変</sup>んを案に冠子か<sup>せ</sup>し

卯月又ふか<sup>一</sup>め<sup>せ</sup>れ<sup>て</sup>め  
五月<sup>い</sup>う<sup>や</sup>あ<sup>ひ</sup>お<sup>こ</sup>う<sup>の</sup>秋<sup>も</sup>成<sup>り</sup>て<sup>も</sup>い<sup>ん</sup>冠<sup>子</sup>核<sup>ど</sup>は<sup>か</sup>  
ら<sup>い</sup>て<sup>三</sup>度<sup>全</sup>我<sup>山</sup>に<sup>庵</sup>を<sup>お</sup>す<sup>よ</sup>洛<sup>の</sup>青<sup>山</sup>約<sup>し</sup>く<sup>し</sup>か<sup>く</sup>  
たる冬にもぬりて清風<sup>さ</sup>あ<sup>ら</sup>う<sup>こ</sup>の<sup>有</sup>て  
竹<sup>ま</sup>は<sup>ら</sup>な<sup>庵</sup>た<sup>も</sup>く<sup>初</sup>ら<sup>う</sup>れ

昔年又さるる彼<sup>ハ</sup>ひ<sup>ら</sup>もの<sup>う</sup>て<sup>秋</sup>う<sup>旅</sup>小<sup>行</sup>と<sup>き</sup>ふ<sup>か</sup>れ  
又凡雅と絶し秋<sup>か</sup>へ<sup>る</sup>時<sup>を</sup>い<sup>ひ</sup>こ<sup>う</sup>て<sup>雅</sup>談<sup>す</sup>は<sup>く</sup>  
一向の間も雅志<sup>を</sup>い<sup>は</sup>す<sup>の</sup>何<sup>う</sup>て<sup>秋</sup>か<sup>れ</sup>ま<sup>あ</sup>ら<sup>う</sup>  
記<sup>を</sup>書<sup>て</sup>ら<sup>う</sup>ん<sup>彼</sup>己<sup>に</sup>其<sup>の</sup>序<sup>を</sup>し<sup>て</sup>川<sup>柳</sup>の<sup>集</sup>を<sup>撰</sup>む

佛海前柳  
室二七年

出居の早

世死廿二  
橘子、佐都、津、  
口人、

は、輕素し改めて庵と秋光庵と  
我又山居の早春と撰む是四方の街風と試んと也  
集の文句閑ゆて板とす

廿二  
か、は、り、し、

ひ、と、り、寐、乃、さ、く、散、る、涅、槃、哉  
と、い、ら、け、き、又

法、師、

冠、子、ソ、サ、り、と、す、い、ふ、の、と、見、思、さ、い、な  
と、書、て

分、入、ら、ぬ、道、正、由、か、き、と、托、草

卯、月、又、目、を、い、ふ、ふ、の、り、て、ま、て、か、の、浪、花、に、あ、り、し、や  
ま、の、木、に、も、お、さ、し、ま、さ、う、の、ふ、り、と、た、官、と、も、辭、す、人、あ、し  
と、ゆ、い、ま、い、い、ぬ、が、住、家、を、南、河、の、橋、外、よ、う、り、て、や

と、あ、い、ハ、心、の、ま、に、卷、い、ふ、へ、と、り、る

去、年、の、冬、我、住、ま、て、あ、り、吸、露、庵、ハ、人、に、む、ら、せ、て、志  
は、街、館、の、内、に、う、り、て、我、か、つ、き、こ、た、を、も、可、也  
み、ち、ち、水、と、公、の、み、も、と、立、た、ま、し、い、水、を、流、し、水、の  
こ、ろ、も、い、ろ、く、す、の、わ、い、た、て、風、友、と、い、ま、い、折、く、を  
雅、志、と、む、か、い、か、つ、て、あ、ま、い、ま、い、も、い、ま、い、

上、つ、け、の、雪、郎、と、せ、い、か、り、の、む、か、我、門、よ、入、て、あ、り、と  
ま、い、ま、い、に、陽、り、と、

と、が、い、ま、い、雪、乃、く、き、ぞ、わ、い、ま、い、

か、り、せ、い、い、ま、い、て、秋、の、武、に、出、り、夏、に、風、流、一、場  
の、修、行、と、つ、む

お、頼、庵、の、あ、り、秋、風、吐、花、の、む、か、い、か、い、も、い、ま、い、  
あ、り、が、ち、の、ま、い、い、ま、い、雅、事、と、い、ま、い、い、ま、い、  
流、水、の、友、と、い、ま、い、

京の大略きこうと雅遊又十日の飲もいふし  
けくさくかへる年秋風もきこうあつせしかれうへり行  
道への山を題し時やとくぬの吹るふれり句とし  
て送る我ハ逢坂山ヨラサカの題にあつて

後ちて此は巻のあつておろし

武山の双飛州羽不立とましく教宜中ハ行脚の傳せりが  
きこう

秋風と吹ると令せて角令の集と撰

雪郎花ぬき人の集と撰

田家早春の集と撰む

つらも文島岡の板と撰

Watanabe no Takanashi no Wakashū

Enryū no Wakashū

Wakayama no Wakashū

角令  
花ぬき人  
田家早春  
宣中坊の巻の  
人

涼傳自筆 紀行 三冊 上毛富岡坂本千太郎氏

所花ニシテ高崎 市本多夏太君ノ贈寫本ニ  
據リ之ヲ寫ス本書ノ禮本ハ弟ニ也

坂本氏教代ノ祖雪郎 名重宜通祿塚屋次多  
右左衛門同族ノ仲買リ業トシ榮耀高ク又學業

上ハ和歌ヲ澄月ニ多シ宣澄又如意ヲ号ス俳  
諧ヲ初メ蕉堂ニ多シ後涼傳ニ從フ多岐舎雪郎

ト号シ西毛餅壇ノ號將ナリ書茂里世又涼傳ニ多  
才媛ノ名アリシカ夫ニ先ウテ歿シ其ハ追悼ニ太山權

了ノ涼傳ノ編ニ所ナリ雪郎ハ寛政四年二月廿九  
日七十一歳ヲ以テ歿ス坂本氏ハ寛政五年海

醋岡ニ雙ヲ飛ト稀ニ見ル傑作ナリ予ハ今年夏  
本多氏ヲ東通トシテ坂本氏ヲ訪ヒ涼傳及雪

即ノ進書ヲ觀シ其ノ尚皓ノ圖ハ大ニ眼底  
ヲ去ル

海帶紀行ニ每冊題簽ヲ缺ク本多氏ニ假ニ  
漢傳道ノ記ト名クシテ今之ニ從フ

昭和二十二年八月二十三日我昔酷烈燬

多如ク流汗淋漓歎ク眼鏡ヲ拭ク業

ヲ卒ル時ノ類數七十又曰己少皇朝已

人渡是錄 撤



四一〇九  
海  
169

1800 - 1810 2.1.18 2018 1810 1810 1810 1810

1810 - 1820 2.1.18 2018 1810 1810 1810 1810

1820 - 1830 2.1.18 2018 1810 1810 1810 1810

1830 - 1840 2.1.18 2018 1810 1810 1810 1810

1840 - 1850 2.1.18 2018 1810 1810 1810 1810

1850 - 1860 2.1.18 2018 1810 1810 1810 1810

1860 - 1870 2.1.18 2018 1810 1810 1810 1810

1870 - 1880 2.1.18 2018 1810 1810 1810 1810

1880 - 1890 2.1.18 2018 1810 1810 1810 1810

1890 - 1900 2.1.18 2018 1810 1810 1810 1810

1900 - 1910 2.1.18 2018 1810 1810 1810 1810

1910 - 1920 2.1.18 2018 1810 1810 1810 1810

1920 - 1930 2.1.18 2018 1810 1810 1810 1810

1930 - 1940 2.1.18 2018 1810 1810 1810 1810

1940 - 1950 2.1.18 2018 1810 1810 1810 1810

1950 - 1960 2.1.18 2018 1810 1810 1810 1810

1960 - 1970 2.1.18 2018 1810 1810 1810 1810

1970 - 1980 2.1.18 2018 1810 1810 1810 1810

1980 - 1990 2.1.18 2018 1810 1810 1810 1810

1990 - 2000 2.1.18 2018 1810 1810 1810 1810

2000 - 2010 2.1.18 2018 1810 1810 1810 1810

2010 - 2020 2.1.18 2018 1810 1810 1810 1810

2020 - 2030 2.1.18 2018 1810 1810 1810 1810

2030 - 2040 2.1.18 2018 1810 1810 1810 1810

2040 - 2050 2.1.18 2018 1810 1810 1810 1810

2050 - 2060 2.1.18 2018 1810 1810 1810 1810

2060 - 2070 2.1.18 2018 1810 1810 1810 1810

2070 - 2080 2.1.18 2018 1810 1810 1810 1810

2080 - 2090 2.1.18 2018 1810 1810 1810 1810

2090 - 2100 2.1.18 2018 1810 1810 1810 1810

2100 - 2110 2.1.18 2018 1810 1810 1810 1810

2110 - 2120 2.1.18 2018 1810 1810 1810 1810

2120 - 2130 2.1.18 2018 1810 1810 1810 1810

2130 - 2140 2.1.18 2018 1810 1810 1810 1810

2140 - 2150 2.1.18 2018 1810 1810 1810 1810

18

1810

1810



